ＩＳ　光の英雄

光を継ぐ者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ　光の英雄

【Ｎコード】

Ｎ５４４８Ｖ

【作者名】

光を継ぐ者

【あらすじ】

ガタノゾーアとの戦いに勝利し、光の粒子になろうとしていたティガの前に現れた“ティガの世界”の神である“ウルトラマンノア”。彼の力により飛ばされた世界は“Ｉ・Ｓの世界”だった。世界を超えて、光の英雄が再び立ち上がる時、奇跡が起こる。

第一話　プロローグ（前書き）

初めまして。

初めての投稿ですので、アドバイスの方は

よろしくお願いします。

第一話　プロローグ

ガタノゾーアは消滅した。
グリッターゼペリオン光線で倒した後、タイマーフラッシュスペシャルで闇ごと消したからだ。
僕はウルトラマンティガ。・・・光となって消えるのに何で名乗ったんだろう・・・。
膨大の闇を消滅させるためには、膨大の光をぶつけなければならない。
皆の光を受け取って『グリッターティガ』になったとしても、ぎりぎり光が残るくらいで体の形を保てない。だから僕に光を貸してくれたマドカ・ダイゴのために最後の光を使って彼の体と分離し、消えないようにしたんだ。
・・・もう心配ないかな・・・。ＧＵＴＳの皆は僕がいなくなっても頑張っていけそうだ。・・・もういいかな・・・。
「待ってくれ」
消えそうになった僕を呼び止めたのは、胸にＹ字みたいな赤いコアがあり、２つの翼をもつ銀色の“ウルトラマン”だった。
??僕以外のウルトラマン？あなたは誰ですか。
「私の名はウルトラマンノア。この世界での神だ。単刀直入に言うが、君には別世界へ行ってもらおう」
??転生・・・か。でも何故僕なんですか。ほかに適切な人がいるのに・・・。
「君にしか出来ないからだ。詳しくは言えないが、今から行ってもらう世界に本来ないはずの脅威が出現した。ガタノゾーアを闇ごと消滅させる力を持ち、優しい慈愛の心を持つ君なら解決できると判断したのだが行ってはくれないだろうか。」
??・・・僕は守れる命を守れず、救える命も救えなかった僕にどうしろと・・・。

僕はダイゴと同化していたためダイゴの想いが伝わっていた。
エボリュウ細胞を体に移植し、ＮＯ，１になろうとしたが、力を使い果たし死んでしまったサナダ・リョウスケ。ムザン星人に標的にされ、助けようとした目の前で殺されたルキア。昔の村を取り戻すために人々に闇への恐怖を植えつけていたが、村が元に戻らないことを知り自らハンドスラッシュに当たって命を落としたオビコ。かつての友達を救うため体を張って止めようとしたら、その友であるイーヴィルティガの光弾に当たり命を落としたガーディ。
彼らを救えなかった僕が、他の世界を救えるのか分からなかった。
「何を言っている。確かに救える命を救えなかったかもしれないが、その分多くの命を救えばいい。ナーガによって作られたアダムとイブや怪獣になったキングモーラット、ゼルダガスの根絶という想いを叶えようとしたシーラ、宇宙で迷子になったタラバン、そして地球に住む人間たち。君はこれほど多くの命を救ったのだ。」
「君には守るための力がある。その力を他の世界でも使ってくれ。」
ノアはそう言ってくれた。
そうだ。救えなかった命があるのなら、その分多くの命を救えばいいんだ。
？？・・・わかりました。ぜひやらせて下さい。
「行ってくれると信じていた。あとは世界を跳ぶだけだが、君にパートナーをつけよう。そのパートナーと一緒に世界を救ってくれ。」
そう言うとノアは、手で空を切り裂き時空を歪ませた。その中に入ると歪みが小さくなっていった。するとノアは何か思い出したようにこういった。
「１つ言っておくことがある。君の能力は光線技のみ封印し、新たに能力をつけた。その内容はパートナーに聞いてみてくれ。期待しているぞ。」
僕が最後に見たのは次第に薄れていくノアの姿と４つの影が１つの

影になるところだった。

第一話　プロローグ（後書き）

ついに始まったウルトラマンティガ×ＩＳ《インフィニット・ストラトス》のクロス作品【ＩＳ　光の英雄】！！

ティガ（以後テ）：何で僕が主人公なの？

それは僕が君のことを１番気に入っているからさ。いつか君メインのクロス作品を書きたいと思っていたんだ。

テ：ふーん。ところでインフィニット・ストラトスの小説って学園恋愛小説だよね。僕にもヒロインがつくの？

ファンの人には大変申し上げありませんが一夏のヒロインは箒以外のヒロイン全員をティガにつけるつもりなので君には最低でも６人つくかな。

テ：ちょっと待ってよ。それってどういうこと？

次は主人公と専用ＩＳの紹介です。

テ：ちゃんと説明してよ！！

オリキャラ紹介（随時変更有り）（前書き）

投稿してたら停電でパアに・・・・・。

テ：それは残念。でも出来てよかったね。

・・・もしかして前のこと根に持ってる？

テ：・・・・・・・（後ろからオーラが出ている。）

ぎゃあああああ！！！！

テ：今回は僕の説明と僕のＩＳの説明だよ。

オリキャラ紹介（随時変更有り）

オリキャラ紹介

ティガ（古代　光）

この小説の主人公。

ノアの力によってＩ・Ｓの世界に跳んだ際、１５，６歳の青年になってしまった。光線技以外のティガの能力はすべて使える。

のみこみが早く、最初は『Ｇ４』（後程紹介）の補助が必要だったが、クラス対抗戦ではＩＳを手足の如く使えるようになっている。

ノアにより与えられた能力は“ニュータイプ”・“ＳＥＥＤ”・“イノベイダー”がある。

ＩＳのスーツはＧＵＴＳの隊員スーツで、跳んだ際なぜかこの服を着ていた。

技術力も高く、『Ｇ４』から教えてもらった情報から、１から『ハロ』や『須左之男』（後程紹介）を造っている。

国籍は諸事情により日本となっていて、パイロットレベルは未知数である。

ティガ専用ＩＳ　『Ｇ４』（ティガ命名）　第六世代　全身装甲（フルスキン）

ノアがティガのために『ガンダム』・『ストライクフリーダム』・『ダブルオーライザー』・『ユニコーン』を１つにしたもの。自我を持っており、音声や立体映像、プライベートチャンネル、オープンチャンネルで会話が可能。

ＩＳとしては新たな武器を開発できるなどとても優秀。

待機形態はスパークレンス。なぜか変身ポーズをとらないとＩ

Ｓを装着できない。

単一仕様能力（ワンオブアビリティー）『Ｍ・Ｃ・Ｓ（モビルチェンジシステム）』

状況に合わせて、ユニットを変えることができる『Ｇ４』の第一形態専用の能力である。このシステムは機体だけでなく装備面にも適用される。

単一仕様能力（ワンオブアビリティー）『Ｍ・Ｓ・Ｓ（モビルサモンシステム）』

『Ｇ４』の第二形態専用の能力で、『Ｍ・Ｃ・Ｓ』とは違い色々な世界のロボットを召喚できるシステム。ノアにより数多くの世界の情報が入っているため、出せないものはない。最大で五体召喚できる。

第一形態『ファースト』

姿は『ガンダム』に似ているが所々が違う。色はメタリックグレーで、名前の通りＩＳを起動させると、まずこの姿になる。ここから単一仕様能力（ワンオブアビリティー）によってユニットを変えるが、ティガの操縦技術が上がってからは、この形態にならなくともユニットを展開できるようになった。第二形態（セカンドシフト）移行すると展開できなくなる。

万能型『ガンダム』

バランスが取れていて、ティガが最も多く使用するユニット。武器の種類はトップクラスでその量はシャルロットのＩＳ『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』に匹敵する。相手によって装備を変える、まさに万能型である。得意な戦闘スタイルは砲撃戦。

全距離対応広域殲滅型『ストライクフリーダム』

射撃戦を重視した、１対多の戦闘を得意とするユニット。戦い方が特殊なためティガはあまりこのユニットを使わない。スーパードラグーンと呼ばれる自立型移動砲台により味方のサポートも出来

る。機動性も高く、序盤は振り回される。

近接格闘型『ダブルオーライザー』

格闘戦を重視した、ヒット&アウェイ戦闘を得意とするユニット。機動性がユニット1高い。光が『ガンダム』に次いで、多く使用する。『ダブルオーライザー』のＧＮ粒子には通信妨害をする機能は無いが、そのかわり微細ながら治癒機能がある。

短期決戦型『ユニコーン』

射撃特化の『ユニコーンモード』と格闘特化の『デストロイモード』を使い分けるユニット。４機の中で最強だが、その反面負荷が掛かるため使われることが少ない。全ユニット同様に第二形態移行（フト）すると展開できなくなる。

第二形態『？？？』　　解析不可能

バイオロイド『須左之男』

動力源がオリジナルＧＮドライブのグラハム専用機。姿はスサノオで、ＩＳと違い有機物を使った機材を使用しているためＩＳスーツを着なくても動きをトレースする。待機形態はスサノオの兜であり、被って装着する。武器は大型実体剣『舞零武』と小型実体剣『益荒男』である。チャクラムは使用可。

オリキャラ紹介（随時変更有り）（後書き）

テ：作者がいないから僕たちが後書きを担当するよ。

Ｇ４（以後Ｇ）：私の情報が少ないのですが・・・。

テ：（作者の手帳を見て）サブタイトルからしてもどんどん公開されるんだね。

Ｇ：楽しみです。

・・・次の前書きと後書きには出ないでもらえる？

テ：あれ、もう復活したの。

Ｇ：なぜ出てはいけないのですか。

この物語に重要なキャラが出るからさ。
次はティガの敵キャラが出ます。
三話目もよろしくお願いします。

テ＆Ｇ：感想もよろしくお願いします。

第二話　　元凶（前書き）

初めまして、???さん。

???：我もこの小説に出るのか・・・。

その通りです。しかもおいしい役です。

???：期待しよう。

それでは、第二話始まり始まり。

第二話　　元凶

・・・ついにこの時が来た・・・。あの時は死ぬかと思ったほどだ。だが我も運がいい。この世界に来てから力がみなぎるようだ。我が“駒”達もしっかりやっているだろう・・・

これであの忌まわしきガンダム達に復讐ができる。

「・・・・・・・・・・・・」

・・・やはり邪魔だなこやつは。我が“地球清浄化計画”に必要ない。消滅させるのも面倒だ。何もできないように封印しておこう。

・・・これで問題ない。さて・・・、また何か来たな。今度は何者だ・・・。

「っと。なんなんだ此処は。ってなんで俺がアルケーに！！」

「そう言われると私もシナンジュになっている。不思議だな。」

突如、２つの閃光が出て２つの真紅のＭＳ？？ＭＦかもしれない？？が現れた。どちらにせよ我と似ていることは確かだな。

会話から推理すると、どうやら人間のようだ。面白い。

「あっ。何だテメーはって、デカっ。なんじゃこりゃ！！」

「初対面の人に。失礼だぞ。」

？？ほう、１つ目の方は礼儀正しいそうだな。もう一つの方は戦い好きとみえるな。

「へぇ、解るのかい。面白いじゃねえか。俺の名前はアリー・ア

ル・サーシェス。戦争が好きで好きでたまらない、人間のプリミティブな衝動に殉じて生きる、最低最悪の人間だ。」
「サーシェス、もっと優しく自己紹介してみてはどうだろう。私の名はフル・フロンタル。私の世界の「シャア・アズナブル」の器にされた、ネオ・ジオンの首魁だった男だ。」
なるほど、興味深いな。この者たちなら我が計画に必要だな・・・。
「おいおい。俺たちは名乗ったんだぜ。お前も名乗れよ。」
「サーシェス。」
??よいではないか。サーシェスのような者は嫌いではない。むしろ好きだ。
「いいねぇ。俺もそんな奴は好きだぜ。」
「全く・・・。とりあえず名前を聞かせていただきたい。」
??そうだな。我が名は・・・・・・。

第二話　　元凶（後書き）

サーシェス（以後サ）：おい作者。

フロンタル（以後フ）：サーシェス。

まあまあ。どうしたのサーシェス。

サ：何でおれたちも出るんだよ。

ちょっとシリアスな展開にしたいからね。

あと、いつから二人は仲良くなったの。

サ：俺とフロンタルが出会ったのは、たしか・・・。

フ：死後の世界でなかったか？

死後って、どこの戦線だよ。

サ：あいつら今何してるかな？

？？？：盛り上がっているな。

サ：おせーよ。

フ：サーシェス。

何回言ってるの、そのセリフ？

？？？：とりあえず、来たばっかりだがお開きにしよう。

後書きが長い・・・。
次はティガが飛んできます。

？？？&サ&フ：誰だそれは。

まあまあ。次回もよろしくお願いします。

？？？&サ&フ：感想よろしく頼む。

第三話　ＩＳ学園（前書き）

テ：とうとうこの時が来たね。

やっと君が跳んだ後の話が書ける。

テ：僕もなんだか楽しみになってきたよ。

・・・あの人に会うんだよな、ティガは・・・。

テ：あの人って？

後書きでわかるよ。それでは三話目スタート！！

その瞳は、何を見る・・・。

テ：どこの通りすがり！！

第三話　ＩＳ学園

「っと危ない。」
目が覚めたと思ったら、なぜか落ちていて地面が迫っていたから、空中で反転して地面に降り立った。下が土でよかった。コンクリートみたいに固かったら頭をぶつけて出血していただろう。
「ここがその世界かな。何かローマのコロシアムみたいな場所だね。」
僕が降り立ったところは、周りが観客席に囲まれた闘技場のようなところだった。
「えっ。何でこの服を着ているの？それに、なぜか人間になってる！！」
僕が着ていたのはなぜかＧＵＴＳの隊員が着ているスーツで、たしか宇宙服にもなれる高性能のスーツだ。それよりも、僕の手をよく見ると見た感じ１５，６歳の青年の手をしていた。さっきまではウルトラマンだったのに・・・。
それはさておき、まずこの世界のことを調べｍ「そこの侵入者、手を上げろ！！無駄な抵抗はやめろ。」って、何ですか？
よく見ると、２人の女性がパワードスーツみたいな何かを付けて立っていた。今喋った人が付けているのは接近戦に特化したようなフォルムで、もう１人のほうは射撃戦に特化したようなフォルムだった。これじゃあ間が悪い。とりあえず相手の指示に従おう。その方が情報を集めやすいからね。

身柄を拘束された僕はどこかの部屋に連れて行かれた。そこで３０分くらい待たされている。さっきの人たちは上の人に報告しているんだろうな。
言い忘れていたけど、僕がこの世界に来たのは夕方みたいで、さ

っき息苦しかったから服のファスナーを開けたらなぜかスパークレンス（？）が出てきて、２人に取られてしまった。
スパークレンスのことについて考えていると、扉が開きさっきの女性が入ってきた。年は２０代後半で黒いスーツが似合う、俗に言う美人であった。
「お前には色々と聞きたいことがある。質問には全て答えてもらうぞ。」
今の僕の立場は、尋問されている容疑者みたいだ・・・。
「お前の名は『古代　光』で合っているか。」
今なんと・・・。僕はティガですけど・・・。
「着ているスーツの背中にそう書いてある。違うのか。」
この名前・・・、たぶんノアさんが考えてくれたんだろうな。
「いえ、合っています。」
「そうか。では古代、お前の出身はどこだ。」
「生まれはわかりませんが、日本で育ちました。」
・・・嘘はついていないよね・・・。
「次の質問だ。」
そういうとスパークレンスを取り出して、こう言った。
「お前の持っていたこのＩＳはなんだ。」
「ＩＳ？何ですかそれは。」
「ＩＳを知らないだと。どういうことだ。」
しまった。僕はこの世界の人間じゃないということがばれる。どうしよう。
「そのことでしたら私がご説明します。」
今の声はどこから。この人も突然のことで驚いているよ。でもこの部屋には二人しかいないから、喋るとしたら・・・。まさか！
「初めましてマイスター光。」
僕たちに話しかけてきたのは、紛れもないスパークレンスだった。

第三話　ＩＳ学園（後書き）

だあああ！！考えていた所まで行かなかった。

テ：もう夜遅いからね。

千冬（以後千）：全くだ。考えもなしに書き始めるからだ。

いや考えてはいたんだけどね・・・。

テ&千：言い訳しない（するな）！！

・・・ごめんなさい。

Ｇ：次は戦闘シーンまで行けますかねえ。

頑張ってみるよ。何せ僕は光を継ぐ者だからね。

次回は初めてのＩＳ起動をするよ。

テ&Ｇ&千：感想待っています（いる）。

第四話　新たな出会い（前書き）

本来３，４話は１つの話だったのに・・・。

テ：そうなるととても長くなるでしょ。

千：長くなると飽きられるからな。

確かにそうだね。頑張って書き直してみるよ。

次は２人の会話に『Ｇ４』が加わります。

作＆テ＆Ｇ＆千：それではどうぞ

ティガの瞳は何を見る・・・。

テ：だからどこの通りすがり！？

Ｇ：作者は好きですね、そういうネタ。

第四話　新たな出会い

「君が・・・。でもマイスターはちょっと。」
「でしたらマスターと呼ばさせてもらいます。」
「ＩＳが喋るなど、聞いたことがない。」
あちらはあちらで驚いているようだ。でもなんで僕がＩＳを？
『それは、マスターの世界の“神”であるノアが使わしたからです。ちなみにこの回線は、プライベートチャンネルと呼ばれるものです。頭の右後ろで話す感覚です。』
『・・・こんな感じかな。』
『さすがですマスター。これから重要な話にはこの回線をお使いください。』
「いつまで黙っているつもりだ。」
いけない。つい夢中になって忘れてた。
「すみません。ではマスターの世界について説明させていただきます。」
するとスパークレンスのクリスタル部分が光り、壁に映像が映し出された。そこに映ったものは、なんとガギ戦っている僕の姿だった。続いてゴブニュやウェポナイザー、イルド、ゾイガーにガタノゾーアと戦うところが映し出された。あちらはまるで夢でも見ているような顔になっていた。当然ですよね。だってあの巨人と怪獣が戦っているのだから。
「これはマスターがティガとして怪獣たちと戦っていた時の映像です。ティガとはこの巨人のことです。」
まあ間違ってはいないよね。・・・この場合、ティガが僕自身なんだけど。
「マスターはこの世界の歪みを破壊するために来ました。私はそのパートナーとしてこの世界に来たのです。故に私たちに敵意はありません。」

「・・・つまりお前たちは別の世界から来たのか。」
話を分かってくれた。これほど嬉しいことはない。
「ならばお前たちにも話さなければならないな。この世界について。」
そう言うと、この世界について話してくれた。解りやすく要約して言うと、
・この世界にはＩＳ（正式名称インフィニット・ストラトス）と呼ばれる宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツがある。
・ＩＳには核となるコアがあり、それを造れるただ1人のＩＳ開発者の『篠ノ之　束』が行方をくらましているため、４６７個しかない。
・ＩＳはその圧倒的な性能から軍事転用されかけたが、アラスカ条約により今ではスポーツとして使われている。
・本来ＩＳは女性にしか使えないのだが、『織斑　一夏』はなぜかＩＳを使え、世界で唯一の男性装着者である。
・・・こんな感じかな。うまく要約できているといいけど。
「さて、こちらの世界のことは話したぞ。次に古代のＩＳのことについて説明してもらおう。」
「マスターとは違う世界の、ＭＳ（モビルスーツ）と呼ばれるロボット達がＩＳになったのが私です。」
なるほどって、どういうこと。達って？
「私は『ガンダム』『ストライクフリーダム』『ダブルオーライザー』『ユニコーン』という４機のガンダムタイプのＭＳからなっているからです。」
すごいね。でもなんで僕の考えがわかるの？
『見え見えだからです、マスター。』
そんな・・・。僕って思っていることが顔に出るのかな。
「とりあえず、君の名前を教えて。」
「まだ名前が決まっていなくて・・・。」

「そうなんだ。だったら４機のガンダムという意味の『Ｇ４』ってどう？」
我ながら最高のネーミングだよ。
「いや。最高とは言い難いな、そのセンスは。」
なっ、あなたにまで解られるとは。これはナンセンスだ！！
「でも嬉しいです。マスターが付けてくださったので、ありがたく使わさせてもらいます。」
「では『Ｇ４』。お前の情報を開示してもらおうか。」
「わかりました。それでは。」
『Ｇ４』はまたクリスタル部分から映像（今度はホログラムだ）を出した。スペックが表示されている４つの機影がガンダムらしい。
・・・かっ、かっこいい！！
それを見ていた隣の女性は
「これからアリーナにて『Ｇ４』の性能を検証する。実戦形式だから手を抜くなよ。あと私の名は織斑千冬だ。ここでは織斑先生だ。わかったな。」
・・・ということはここはＩＳの操縦を教える学校で、織斑先生はその教師なんだ・・・。

第四話　新たな出会い（後書き）

次はやっと『Ｇ４』がその姿を見せます。ウェイクアップ！！

テ：もう慣れちゃったよ。

Ｇ：でもそうすると、相手はあの・・・。

千：いや、私ではないぞ。

そうですよ。相手はあの先生です。

千：なるほど。そういうことか。

テ＆Ｇ：？？？

今日の後書きはこれで終わり。

次回は初めてのＩＳです。

千：感想を待っている。

テ＆Ｇ：だから誰ですか。説明してください。

第五話　初めてのＩＳ（前書き）

【『Ｇ４』の説明が追加されました。】

テ：やっと『Ｇ４』の姿が見られるんだね。

読者の皆さんは脳内で映像化してください。

Ｇ：ところで模擬戦の相手は誰なんですか。

まあそれは本文を見て確認してね。

それでは　第五話　初めてのＩＳ　始まり始まり。

第五話　初めてのＩＳ

織斑先生はＩＳの動かし方を簡単におしえてくれた。ちょっと難しいけれど『Ｇ４』が補助をしてくれるから、とても嬉しい。

そうこうしていると、アリーナに到着した。コロシアムに見えた所はアリーナだったんだ。

「ＩＳを装着させたら、対戦相手が来るまで少し待っていろ。余計な真似はするな。お前たちを信用していないわけではないのだが、こうしないと、上がうるさいからな。」

そういうと織斑先生は行ってしまった。まあ仕方ないことかな。事情が事情だからね。

「とりあえずＩＳを装着させましょう。自分がＩＳになる考えです。」

僕は、自分とＩＳが一体化するというイメージを思い浮かべると、ＩＳが装着され・・・なかった。あれ、おかしいな。イメージし間違えたかな。

「！！１つ言い忘れていました。」

「どうしたの、『Ｇ４』。」

「私の場合は特別みたいで、ノアさんから「なぜか変身ポーズをとらないと装着できない」と言われたことを忘れていました。すみません。」

「いやいや、大丈夫だよ。」

しかしこれはまた面倒なことになったね。仕方がないから、僕は右手にスパークレンスを持ち、右腕と左腕を前でクロス（右腕は地面に垂直、左腕は地面に平行）させ反時計回しに回して右腕を上に突出し、「Ｇ４～～～！！」と叫んだ。すると光が体を包み、ＩＳの姿を形成していた。

このＩＳはどうやら全身装甲（フルスキン）でツインアイが輝くメタリックグレーのＩＳだった。

「この形態は第一形態『ファースト』です。ここから単一仕様能(ワンオフアビリティ)力の『M(モビルチェンジシステム)・C・S』によりユニットを変えるのですが、初めてなのでまずは『ガンダム』にしてみましょう。」

たしか『ガンダム』はっと・・・。あぁこれか。僕はこのISが『ガンダム』になるイメージを思い浮かべるとISが光り輝いて、『ガンダム』を形作った。

「これが『ガンダム』。やっぱりかっこいい!!」

「私的には『ダブルオーライザー』かと・・・。!!今対戦相手が来ました。」

上空を見ると、あの時織斑先生と一緒にいたもう1人の先生―だと思う―がいた。

「古代君のIS、たしか『G4』でしたっけ?全身装甲(フルスキン)なんですね。かっこいいな。」

「あの・・・。」

「あっ、ごめんね古代君。私はIS学園の1年1組の副担任の山田真耶です。山田先生って呼んでね。」

・・・何故か、先生に見えない。あの時は色々な意味で忙しかったからしっかり見てなかったけど、山田先生は多分20代前半だと思う。何で“多分”かって?だって見た目がまだ少女らしいからだよ。何か“背伸びしている女子”みたいで大人に見えないんだよ。

『それではこれより、古代光対山田真耶による模擬戦を開始する。双方指定の位置で待機。』

この声は織斑先生か。どちらかと言ったら織斑先生と戦ってみたかったな。山田先生が付けているのは『ラファール・リヴァイブ』という第二世代のISのようだ。見た目通り射撃戦に長けているISのようだ。

『それでは始め。』

アラームが鳴り、模擬戦がスタートした。山田先生はその姿からは想像できないような技量で攻めてくる。ライフルの一撃一撃が精密で、よけるのが精一杯だ。ちぃっ、被弾した。

「何か武器はないのか。」
そう言い自身のＩＳの装備欄を出すと、とてつもない量の装備が出てきた。どれにするか迷っていると『Ｇ４』がビームライフルを提示してきた。
「これなら！」
すぐさま具現化させようとするが、なかなか出来ない。
「くっ。ビームライフル！！」
武器の名前を呼んで出すのは初心者のやり方だが仕方ない。ビームライフルを右手に持ち、狙いを定めて引き金を引く。銃口からピンクの閃光が飛び出し、山田先生に向かう。威力？もちろん最大だよ？
山田先生はかろうじて直撃は避けたが、掠ったことでシールドエネルギーが削られる。ＩＳの戦闘では先に相手のＩＳのシールドエネルギーを０にすることで勝ちとなるきわめてシンプルな勝利条件である。ちなみに装着者は絶対防御により守られるため、命に別状はない。そんなことだからさらに２射ビームライフルを撃つ。どんなに早く回避しても、光と同じ速さのビームはそう簡単に避けられるものではない。山田先生はさらに掠り、３分の１ほど削られた。
「とりあえず３分の１は削ったか。それにしてもこのビームライフル、なんて威力だ。」
「ビーム兵器！！まだトライアル段階なのに。」
どうやらノアさんはとんでもないＩＳを僕にくれたようです。
「どちらにせよ、このまま攻め込む！！」
バックパック（ブースター）についているビームサーベルを左手に持ち、ビームライフルの威力を落としてから連射しながら接近する。連射したことによりその場からあまり動かさなかったおかげで、接近した勢いのまま体当たりし、相手を怯ませる。そこに２回サーベルで真一文字に斬る。シールドエネルギーはさらに削れて残り３分の１となった。・・・かっこよく決めようかな。

『Ｇ４』は一度間合いを取って、再び接近する。『ラファール・リヴァイブ』は近づけないために2基のミサイルを『Ｇ４』に撃ち込むが、『Ｇ４』は速度を緩めない。ミサイルはそのまま『Ｇ４』に進み、当たって爆発した。爆発の所為で煙が立ち込める。

やったのでしょうか。彼はミサイルに“自ら”当たっていったように見えたのですが。試合終了のアナウンスが聞こえないということは終わっていないということですので、気は抜けられません。それにしてもこの煙の量は何でしょう。ミサイルの火薬の量なら少ししか出ないはず。まるで“意図的”に出しているようにしか・・・。まさか！！

『警告。敵ＩＳ急速接近。』

警告表示が出て対応しようとしたときには、すでに白いＩＳが眼の前に迫っていました。

待ってました！！ミサイルが直撃する瞬間、“ライフル”を投げてミサイルを破壊。その後、大量の煙幕を出して姿をくらましてから、荒業だけど3秒の間ＩＳの機能を停止、センサーに掛からない様にしたんだ。相手はベテランだから動かないことを予想しての戦術です。まさかこれほどうまくいくとは思ってもみなかっけど。とりあえず3秒後にＩＳを再起動、ビームサーベルを両手に持ち最大推力の6割で接近。そして相手のＩＳにクロス斬りを決めてシールドエネルギーを0にしました。一撃に重みをかけ過ぎたのか、山田先生は落ちていった。あのままじゃ危ないから、最大推力で山田先生の近づき膝裏と背中を腕で支え、落下速度を落とした。いくら絶対防御が発動してもいい思いはしませんしね。

『勝者・古代光』

アナウンスが入り、試合終了のブザーが鳴った。そうか、勝てたのか。

「こ、ここ古代君っ／／／そそそろそろ下してもらえないかな／

／／」
しまった。減速させてからアナウンスを聞くまでずっとこの体勢だった！！こんな恰好じゃ、山田先生は恥ずかしいに違いない。とりあえず顔を真っ赤にしている山田先生を下してから模擬戦のことについて聞いてみる。
「あの・・・、僕のＩＳ操縦は合格ラインを超えていますか・・・？」
しかし、心ここのあらずなのか放心状態に陥っていた。
『マスター、今の状態では聞けないと思いますのでとりあえず織斑先生のところへ行きましょう。』
『それもそうだね。あんな恥ずかしいことをさせちゃったからね。』
『・・・はぁ、もしかしてマスターは天然なのでしょうか・・・。』
『あれ、『Ｇ４』今何か言った？』
『いいえ何も、それより早くいきましょう。』
？？？どうしたんだろう。さっきからずっと急かしてるようにしか見えないけれど。まあとりあえずは織斑先生のところへ行こう。
『マスターは、罪深い人です。』
『Ｇ４』の呟きは誰にも聞かれなかったのであった。

第五話　初めてのＩＳ（後書き）

山田先生のファンの皆様、誠に申し訳ありません。どうしても主人公に『フラグ』を立てたかったのです。

テ：あとの５人は誰なんだろうねぇ。（笑）

ティガ、怖いからやめて。

Ｇ：そうですよ。怖がっているではないですか。

『Ｇ４』、庇ってくれてありがとう。

Ｇ：投稿できなくなったらどうするんですか。

・・・ひどいよ・・・。

まあそれはさておき、次回はインフィニット・ストラトスの本来の主人公が出ます。

テ：とうとう本編に突入だね。

Ｇ：これからが楽しみです。

次回は、第六話　転入です。アドバイスなどを待ってます。

テ＆Ｇ：感想もよろしくお願いします。

？：俺はいつになったら出れるんだ？

第六話　転入（前書き）

テ：そういえばこの前の戦闘描写で煙の中から突撃するっていうのがあったけどどんな感じ？

簡単に言えば、ガンダム００ファーストシーズンの２ｎｄＯＰでエクシアがアインの砲撃を盾でガードした時、盾が壊れて煙が出たでしょ。そのあと煙の中からＧＮビームサーベルで攻撃するところがかっこいいと思ったからそれを再現してみた。

真耶（以後真）：そうだったんですか。・・・だからかっこよかったんだ。

光　（テ）：山田先生、あの時は大丈夫でしたか。

真：あっ、いやっ・・その・・・。

ほらほらそこで会話に花を咲かせない。もうすぐ始まるんだから。

それでは第６話スタートゥ！！

第六話　転入

あの後、僕はＩＳ学園に入学した。たしかクラスは１－１だったかな。でもそのクラスに男のＩＳ操縦者の『織斑一夏』がいて良かった。クラスメートが全員女子だったら、胃に穴が開く思いだったろうな。でも何故僕がＩＳ学園に入学した理由は、１つ．僕は別世界から来た人間なので戸籍が無いこと、２つ．そもそも僕は人間ではなかったので、お金が無いこと、３つ．僕が世界で２人目の男性のＩＳ操縦者であること、この３つのせいで、僕は各国から狙われる事となったので、ＩＳ学園に入るほかなかったんだ。ちなみに戸籍は日本でお金は政府から直々に支給されるそうだ。・・・まあ使うといってもＰＣや携帯（スマートフォンというらしい。ＰＤＩより性能が低いけど）、普段着（『Ｇ４』に選んでもらった）などを買っただけだからそんなにいらないけど。・・・いや、色々なものを造りたいから必要か。『Ｇ４』の情報にＭＳ（モビルスーツ）のことが大量に入っていて、僕の技術者魂に火が付いたんだ。・・・ホリイさんに毒されたかな・・・。

まあそれはともかく、僕は織斑先生と山田先生に連れられて部屋の前に着いた。その間山田先生は顔を赤くさせていたけど、風邪を引いたのかな。お体は大切に。

「ここで待っていろ。」

そういうと先生方は部屋に入っていった。そのあと『パァァン！！』と、どう考えてもその音が出るようなものは持っていないはずなのに、そんな音が響いた。

「では入ってこい。」

織斑先生にそう促されて部屋に入ると、視線が一斉にこっちに向いた。結構怖い。大量のクリッターも怖いものだが、これもまた怖い・・・。

「自己紹介しろ古代。」

「はい。僕の名前は古代光です。趣味は機械の分解に、解析、設計に組み立てです。これから一年間よろしくお願いします。
すると、クラスの皆はシーンと静まり返った。こんなマニアックな趣味を公開したからかな。失敗したなぁ。
「き」
「き？」
「きゃぁぁぁぁぁ！！」
何この声！まるで空気が振動してるよう・・・、ってホントに振動してる！？
「２り目の男子よ。」
「織斑君も美形だけど、古代君もなかなかイケメン！！」
「金色の不死鳥で宇宙の彼方まで連れてって～～！！」
それってシーラ？この世界に怪獣はいないよね。戸惑う僕は山田先生に助けを求めるが、やっぱり顔を赤くして放心状態になってる。やっぱり頼るのは織斑先生に頼るのか。織斑先生、助けてください。
「黙れ馬鹿共！！」
すると叫んでいた女子たちは一斉に黙る。織斑先生凄い。イルマさん並みのカリスマ性だ。
「古代の両親は事故で他界。そのあとは孤児院で暮らしていたがＩＳの適性検査で適性があることが判明。しかし異例なため今まで隠していたが織斑の出現によりこのたび入学することになった。古代、お前の席は窓側の空いているところだ。」
なんですかそのバックストーリー。こじつけにもほどがありますよ。でもそのカリスマ性のためかみんな信用しちゃってる。さすがというべきか。
「それではこれでＳＨＲを終わる。」
こうして僕の学園生活が幕を落とされたのである。
休み時間になるともう疲れる疲れる。１時限目は数学でまあよかった。だけど授業が終わった途端に女子たちが僕の席まで来て、２

時限目の国語まで延々と自己紹介をされた。名前は覚えたかって？当たり前でしょ、クラスメートなんだから。
「ちょっといいか。」
また女子たちが来るのかと思ったら、女子としてはやけに低い声で呼ばれた。声のした方を向くと、本来『世界で唯一の男性ＩＳ操縦者』の『織斑一夏』がそこにいた。
「古代光だっけ。俺の名前は織斑一夏だ。よろしくな。」
「こちらこそ。それに僕のことは光でいいよ。」
「俺のことも一夏でいいぜ。」
こうして織斑一夏との出会いをした。その際握手をしたがどこかでシャッター音が聞こえたような。だけどこの時、僕は知らなかった。男のＩＳ操縦者の生写真は、裏市場で高値がついていたことに。

４時限目が終わり、昼食の時間になる。お昼御飯を食べるために食堂へ向かおうとしたが、一夏が呼び止めた。
「光、お前今から飯食いに行くか。」
「そのつもりだけど、どうしたの。」
「一緒に食おうぜ。紹介したい奴もいるし。」
「いいよ。じゃあ一緒に。行こう」
「あぁ。」
すると一夏は、窓際の席（僕の３つ前の席の）女子を誘いに行った。女子の中では背が高い方に入り、黒髪のポニーテールが特徴的だった。彼女は躊躇っていたが、一夏が手を引いて強引に連れてきた。一夏って強引だね。彼女嫌がっ・・・・、訂正嫌がってるどころかむしろ嬉しがってる。もしかして・・・。
まあそんな感じで３人で食堂へ行った。その間僕の居場所がなくて大変だった。だってそうでしょ？好きな人の近くにいるのに、見ず知らずの人がいるんだから焦った焦った。食堂では色々な学年の女子たちがたくさんいた。まあ女子高だからそうだよね。ちなみにこの食堂は食券システムらしく、彼女は焼き鮭定食、一夏は味噌鯖

定食、僕は一度食べた見たかった麻婆豆腐定食を注文した。
「紹介するよ。こいつはおれの幼馴染の箒だ。」
食事して早々彼女のことを紹介した。なるほど幼馴染ねぇ。
「一夏、勝手に紹介するな。」
「まぁいいじゃねえか。」
「とりあえず僕のことはＳＨＲで紹介したよね。」
「篠ノ之箒だ。」
あれっ、たしか『篠ノ之』ってＩＳの製作者と苗字が一緒だったような。まあどうでもいいや。
「ここは私も名乗った方がいいのでは。」
そうだね・・・って、『Ｇ４』喋っていいの？
「あっ。」
あって。ほら、２人が戸惑ってるじゃん。
「？誰だ。今声がしたんだけど。」
「・・・はぁ。驚くにしても小声でね。それじゃあ『Ｇ４』、２人に挨拶して。」
「わかりました。私はマスターである光のＩＳ『Ｇ４』です。今後、お見知りおきを。」
『Ｇ４』が挨拶をすると２人は驚いた顔になった。
「なっ！ＩＳって喋ることができるのか？どうなんだ箒。」
「私に聞くな。姉さんには言われてなかったからな。」
やっぱり妹さんだったか。でもなんか訳有りのようだから、あえて追求しない。
「このＩＳは、他と少し違って特殊だから話すことができるんだ。だけど、物は話すことができないと教えられてきたから今まで話せなかったんだ。だからＩＳ学園に入る時は他の人と話がしたいって言ってたんだ。」
これはあながち嘘じゃない。本気で『Ｇ４』は周りの人と話をしたかったのか、入学すると言った時はとても喜んでいた。
「そういうことだから一夏、篠ノ之さん。僕たちだけのときは『

Ｇ４』と話をしてください。お願いします。」
あの時は本気でそう思い、頭がテーブルに付くほど下げてお願いしていた。
「・・・わかった。それじゃあ午後９時にお前の部屋に行くよ。部屋はどこだ？」
「えっと・・・、１０２６号室だよ。」
「なんだ俺たちの部屋の隣じゃん。それなら俺たちも行きやすい。」
「ありがとう２人とも。」
「別に礼を言われるほどではないがな。それと私のことは箒でいいぞ。」
「わかった。それなら僕のことも光でいいよ。」
「ありがとうございます、マスター。」
『Ｇ４』も喜んでいるし、僕の友達も増えたから嬉しいけどね。

そんなこんなで５時限目が終わりそうになっていた。ちなみに先生は織斑先生で一夏とは姉弟らしい。全然似てないよ。
「少し早いが授業を切り上げる。この余った時間で少し話し合いたいと思う。どうだろう、もう一度クラス代表を決めてみないか。」
この時、クラス全員（光を除いた）は『どうしてするんですか？』という目で織斑先生を見た。
「こいつより、転校生の方がデキる。それは間違いない。」
先生はそういって一夏を指した。一夏、クラス代表だったの！？それよりも僕の方がデキるってどういうこと？って、この場が盛り上がってきたよ。どうしよう・・・。
「それならば、私セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが相手して差し上げますわ。いくら一夏さんより強くても私に勝てなくては務まりませんわ。」
「いいだろう。では明日第３アリーナにて古代とオルコットの模擬戦をする。各自遅れないように。」

「ちょっと待ってくださいよ。勝手に決めないでください。色々なことを聞きたいのに…。」

いくら光が言ってもこの状況では誰も聞いてはもらえないのである。むろんもう1人も・・・。

「・・・はっ、俺の意見は全く無視かよ千冬姉ぇ。」

第六話　転入（後書き）

ここからは、ＩＳの登場人物とティガ扮する光が雑談する光の部屋をお送りします。

光：どんな話をすればいいの。

ぶっちゃけ、何でもいいです。関係しないことでも。それでは今日のゲストをお呼びしましょう。今回は織斑一夏です。

一夏（以後一）：よう、光。

光：それじゃあどんな話をする？

一：そうだな。じゃあ光の趣味で機械の設計があったろ。どんなのを作ったことがあったんだ？

光：例えばこの　ＰＤＩとか？

一：なんだこれ？

光：これはいわば携帯みたいな物で、他にもレーダーや熱源探知、さらには放射能探知ができるんだ。

一：すげーなこれ。そういえば放射能のことで思い出したんだが、原発の稼働のことなんだけど本当に大丈夫なのか？

光：まぁこれは僕の考えだけど、東北の原発は地震に次いで津波が押し寄せてきたから原子炉が耐えられなくなり、水素爆発したと

思うからそんなに危険じゃないと思うよ。

一：だといいけどな。

光：それはそうと、一夏ってクラス代表だったんだ。

一：まあ成り行きだけどな。

光：代表だからやっぱり強いんだろうな。一度戦ってみたい。

一：よしてくれよ。俺はそんなに強くない。

光：そうなのか。それじゃあ、一緒に特訓しようぜ。

一：あぁ、いいぜ。

お話のところ申し訳ないけどそろそろ時間だからこれにて終了～～。次のゲストは誰になるのでしょう。

次回は第七話　対セシリア戦です。

光＆一：感想待ってます（待ってるぜ）。

第七話　対セシリア戦（前書き）

【『Ｇ４』の説明が追加されました。】

今度解禁されたのは『ストライクフリーダム』。好きなガンダムのうちの１つだよ。

テ：結構更新率が高いね。よく頑張るよ。

脳内をトランザムして頑張ってるからね。

Ｇ：どうでもいいですから、早く始めてください。

わかったよ。それでは第七話始まり始まり。

第七話　対セシリア戦

今日の授業も終わって僕は自分の部屋である、１０２６号室に戻った。ＩＳ学園の寮部屋は本来２人部屋なのだが、僕が突然やって来たことにより部屋が空いてなかったので、仕方なく１人で使っているんだ。お陰で色々な機材を持ち込めて結果オーライなんだけど・・・。

とりあえず、９時から一夏たちが来るので少し整理しないといけないな。

整理し終わった時には８時を過ぎてたので、夕食を簡単に済ませて待ってた。暫くすると、扉を叩く音が聞こえたので開けてみると、一夏たちが来ていた。ちょっと早いけどいいか。

「来たぜ、光。」

「夜遅くにごめんね。待ってたよ。」

２人をベッドに座らせ（もちろん一夏と箒は同じベッドの上だよ）、４人――正確には３人と１つだけど――で話始めた。

「改めて、俺の名前は織斑一夏だ。よろしく。」

「篠之乃箒だ。」

「初めまして。マスターである古代光のＩＳの『Ｇ４』です。よろしくお願いします。」

「やっぱりよそよそしいよ。もっとやわらかくなれない？」

「やわらかく？私は金属ですから熱しないとやわらかくなりませんが。」

いや、そういうことじゃないんだけど・・・。

「おもしろいな、光のＩＳは。」

「喋るＩＳは聞いたことがなかったが、悪くないかも知れないな。」

よかった、２人にはわかってもらえて。『Ｇ４』の装着者にとっ

てはこれほど嬉しいことはない。いい友達を持てた～～。
「そういえば、光は明日セシリアと戦うんだろ。」
「まぁ、そうなるね。オルコットさんは代表候補生だから強いと思うな。」
「セシリアのＩＳの『ブルー・ティアーズ』は強いぜ。俺も戦ってみたけど、代表候補生だけあるよ。」
これは苦戦するかな・・・。少し『Ｇ４』に聞きたいことがあるけど、箒と話してるから聞くに聞けないし・・・。
「まぁ明日はがんばれ。光なら勝てるさ。」
「ありがとう一夏。あっ、もうこんな時間。そろそろ部屋に戻らないと先生に怒られるよ。」
「それはまずい！ここの寮長は千冬姉なんだよ。箒、早く戻るぞ。」
それからは早かった。一夏が箒の手を引いて脱兎の如く帰って行った。一夏速い・・・。
「マスター、どうしますか。」
「そうだね。・・・もう寝るか。」
僕たちは明日に備えて早めに寝ることにした。御休みなさい。

――――――――――日付が変わって――――――――――

僕は今第３アリーナのＡピットにいる。今日の１時限目は僕とオルコットさんの模擬戦にあてられているから、皆が観客席に見に来てるんだ。
「大丈夫か光。」
「今朝から頭のここがなんか・・・、こう・・・、とにかく変なんだ。」
なんでだか知らないけど、朝から後頭部の方が頭痛とはまた違う痛みに悩まされているんだけど、理由がわからないんだ。『Ｇ４』に聞いてみても、「おめでとうございます、マスター。」って言っ

てて何がいいのか分からない。言い忘れていたけど、今ピットにいるのは僕と一夏と箒だけだ。２人は僕を応援しに来てくれた。そのことだけでも嬉しい。

『古代さっさと位置に着かんか。』

すいません織斑先生、まだ痛みが晴れていなかったので。痛いけど行くか。僕は『Ｇ４』を取り出して変身ポーズを取った。後談だが、この装着方法について一夏からはかっこいいなど、箒からは面倒だなと、織斑先生からは鍛えてやるから放課後私のところに来いなどさまざまなことを言われたそうだ。特に織斑先生を説得するのに２時間掛かったことをここに記しておこう。

―――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り―――

背中の形が『ストライクフリーダム』みたいだな・・・。

「全身装甲（フルスキン）のＩＳだと！！」

「ねぇ。全身装甲（フルスキン）ってそんなに珍しいの？」

「あぁ。ＩＳって大体腕と脚に装甲を付けるからな。」

そうだったんだ。そんなことはいいから・・・。

『『Ｇ４』、今回は『ストライクフリーダム』で行ってみない？』

『何を言っているのですか。マスターにはまだ早いです。今回も『ガンダム』で。』

『まず４機全て使ってから慣らしていこうよ。『ガンダム』ばっかじゃそれに慣れて、他のユニットを使えなくなってもいいの？』

『わかりました。マスターの考えで行ってみましょう。』

僕はあの時と同じように『ストライクフリーダム』と一体化するイメージを思い浮かべた。すると僕は『ストライクフリーダム』を形作った。そしてＶＰＳ装甲を起動させて、メタリックグレー色から白や赤に青のトリコロールカラーに変わった。

「かっこいいな光の『Ｇ４』は。」

「ＧＵＮＤＡＭ・・・、ガンダムと言うのか。」

「これは『ストライクフリーダム』。ガンダムはＯＳの頭文字をとったものだよ。」
そろそろいかないと・・・。
「「光」」
「どうしたの２人とも。」
「全力で戦ってこい。」
「そして勝ってこいよ。」
「・・・ありがとう。」
僕はカタパルトに行き、山田先生がカウントを数える。
「古代光、フリーダム、行きます！！」
カタパルトから発射され、僕はアリーナを飛んだ。

っく。頭が・・・。あまりの痛さに押さえたいけど、我慢して定位置まで進む。
「あら、あなたのＩＳは全身装甲（フルスキン）ですの。」
「・・・ＩＳって、そんな風に装着されるらしいから僕のは珍しいらしいよ。」
ほとんどのＩＳってああいう風に装着されるのか・・・。そうなると目のやり場に困る。だって・・・ねぇ。僕の口じゃあ言えないよ。
「でも相手がどんなＩＳを使おうとも、全力で戦わせてもらいます。」
『敵ＩＳ、射撃体勢に移行。ロックオンされています』
どうやら『ブルー・ティアーズ』は射撃に特化したＩＳのようだ。
『それでは始め。』
開始のブザーが鳴り、試合が開始された。オルコットさんは『スターライトＭＫ－？』で撃ってくる。レーザーをぎりぎりで回避していくが、『ストライクフリーダム』の機動性が速すぎて無駄な回避をしてしまう。くっ、撃たれた。でも防戦一方では勝てない。ここで反撃しよう。

僕は両手に装備されたビームライフルでオルコットさんを狙う。2つのビーム（『ガンダム』のビームライフルの全力の半分と同じ威力）が向かっていく。ビームが当たりシールドエネルギーが削れる。・・・なんだろう。相手の動きが先まで見える・・・。

「っ、ブルー・ティアーズ！！」

すると羽のところから4基のドラグーンらしきものが飛び出し、僕を狙ってきた。これは変則的な動きをして相手を混乱させ、一気に撃ち込む武装だ。・・・本来なら避けれないはずなのに、なぜか動きが見えて避けられる・・・。どうしたんだ僕？そういえば頭の痛みが消えてる。

「何故当たりませんの！？」

こっちだって困っちゃうよ、軌道がわかっちゃうんだから。・・・ちょっと待てよ。僕がクラス代表になればたくさんの人を守れるかもしれない。なら！！

「これで終わりにします。」

ドラグーンを4基パージしてビットを狙い、全て破壊する。

「『ブルー・ティアーズ』が！！」

僕はドラグーンを一度戻してから腰にあるビームサーベルを取り出して、急接近する。これでビットはないはずだ。これで・・・。

「――――かかりましたわ。」

なにっ、どういうこと？4基だけじゃないのか。

「おあいにく様、『ブルー・ティアーズ』は6基ありましてよ。」

すると腰のところからミサイルが2つ迫ってきた。だめだ！！間に合わない！！

すると頭の中で種が割れるような感覚に陥り、思考がクリアになっていった。今ならできる！

僕はビームサーベルでミサイルの先端を切って回避した。観客は皆動揺の声を上げた。どうやらさっきの芸当はできないものだと思っていたようだ。まあ、僕もその一人だけどね。

「あなた、どうしてそこまで戦えるのですか。」
ふと、相手であるオルコットさんが聞いてきた。今戦っている最中なのに。だけどここで答えないといけない気がした。
「僕には、守りたいものを守ることができなかったことがあったんだ。だからもうそんなことをしないように、守りたいものは全力で守る。そのためにも僕はここで負けるわけにはいかないんだ。」
再度ビームサーベルを握りなおして、突撃する。
「僕には守りたいもの、守りたい世界があるんだあぁぁぁ！！」
ビームサーベルで『ブルー・ティアーズ』を攻撃、シールドエネルギーを0にしていく。

『試合終了。勝者――――――古代光。』

僕はオルコットさんに勝った。今の僕にはそれだけわかれば十分だった。とりあえずオルコットさんの手を引いてピットへ戻っていく。それにしてもあの感覚はなんだったんだろう。

セシリアの顔が光に手を引かれているとき赤くなっていたのを、光は気づかなかった。

第七話　対セシリア戦（後書き）

今回の光の部屋のゲストは一夏にぞっこんの篠之乃箒です。

箒：ど、どどどういうことだ。

光：まあまあ、作者はほっといて。とりあえず話をしようよ。

箒：そ、そうだな。じゃあ質問するぞ。

光：何でも聞いて。答えられるだけ答えるよ。

箒：何であのＢＴ兵器を避けられたんだ？一夏でも避けるのに精一杯だったんだぞ。

光：僕もよくわからないんだけど、見えたんだよね動きが。

箒：そういうものなのか？

光：さあ、どうだろう？そうとしか言えないから・・・。それじゃあ僕も聞いていい？どうして一夏が好きになったの？

箒：お前もか！！（木刀持ちながら）

光：いや、そういうことじゃないんだけど。

箒：煩い！！（木刀を振り下ろす）

光：うわっ、危ない。（ウルトラ真剣白羽どり炸裂）

何かとすごいよね光は。おや、もう時間。今日はこれまで。次は誰が来るのでしょう。

光：ちょっと、他人事だと思わないで助けて！！

第八話　光の休日（前書き）

やっと投稿できた。

テ：たしか研修でアメリカに行ってたのって２４までだから、２５以降に投稿できたんじゃあ・・・。

実は多分時差ボケで夜早く寝ちゃって・・・。

Ｇ：それで投稿できなかったと。

ごめん。でもネタはいっぱい考えているから。それでは第八話始まります。

第八話　光の休日

今日は学園に入って初めての日曜日。日曜日は休日だから、授業が無くて暇なんだ。何して一日過ごそうかな。そう考えているとドアがノックされた。誰だろう。まぁ、待たせるのも悪いから開けてあげようっと。そう思い、僕がドアを開けるとそこにはイギリス代表のセシリア・オルコットがいた。

「おはようございますわ光さん。」

「おはようオルコットさん。」

「セシリアで構いませんわ。」

いいの？そういう呼び方は友達になってからって聞いたんだけど。まあ本人がそう言うのなら。

「じゃあセシリア、朝からどうしたの。」

「その・・・、も、もしよろしければ、今日一緒に買い物に行きませんか？」

買い物か。買いたいものはすべて買ったからな・・・そうだ。あれを作るための部品を買って来よう。買い物するって言っても、買うものが無ければね。

「いいよ。僕も買いたいものがあったからね。」

そう言うと、セシリアはパァっと顔を輝かせた。それほど買い物に行きたかったんだ。

「マスター、もっと女心がわかるようなだ努力をしてください。」

そうかな・・・・・、ってちょっとＧ４！！今人前で喋らなかった？セシリアも誰が喋ったのか周りを見てるじゃん。・・・なんでこっちを不機嫌な顔で見るのセシリア。

「マスターの部屋には誰もいません。初めましてセシリア・オルコット。私はマスターのＩＳの『Ｇ４』です。以後お見知りおきを。」

「ＩＳにＡＩが搭載されているなんて！！」

やっぱりそういう表情になるんだ。でもまだましな方だよ。山田先生にこのことを教えたら、放心状態になったから・・・。
「まぁ、とりあえず買い物に行こうセシリア。」
「えっ？・・・は、はい！行きましょう光さん。」
まぁ何とか誤魔化せたかな？それはともかく待ってセシリア。まだ準備できて無いから、そう手を引っ張らないで～～。

余談だけど、そのあと僕の部屋に一夏が「俺と模擬戦をしてくれ」と頼みに来ていたらしい。

今日はとてもいい日ですわ。だって光さんと一緒に買い物をするのですから。私のは少し時間が掛かるため、先に光さんの買い物を済ませてから私の買い物をしますの。
「もうすぐ着くから待ってね。」
何を買うつもりなのでしょう。そう私が考えていると目的地に着いたようです。ジャンクショップですか？電気製品なら違うお店でも買えますのに。
「あっ光さん。この前は毎度。」
「やぁガロード。今日も買い物できたんだ。いろいろ仕入れた？」
「もっちろん。ここはそれが売りですから。」
光さんは色々な方とお知り合いなのですね。私も見習わないと。
「ガロード、お客さん？」
「そうだよティファ。この前の光さん。」
「久しぶり。今日も来たよ。」
あら？先ほどからお二人の保護者が見えないようですが。まぁ、詮索されたくない過去は誰にもありますから・・・。
「今更ですけど、そちらの人は光さんの彼女ですか？」
な／／／。たしかに私は光さんのことが、・・・ってそういうこ

とではなくてですね。
「違うよ。セシリアは僕の友達。紹介が遅れたね。イギリスから来た代表候補生のセシリア・オルコット。こっちはこのお店の店主のガトード・ラン。そしてこっちはティファ・アディール。」
「はじめまして。」
「よろしくお願いします。」
「こちらこそよろしくお願いしますわ。」
・・・光さん、少しは考えてくださいまし。

あれ、セシリアどうしたの？そんなに顔を膨らまして。ガロードとティファは苦笑いしてるし。
『・・・やはりもっと努力すべきです。』
頑張ろうかな。女心がわかるための努力。
「それでどうするの光さん。」
「あっ、ごめんごめん。それじゃあこれとこれ、それからこれを各１０個ちょうだい。」
「毎度。それじゃあとでＩＳ学園に送りますね。」
これで終わりっと。じゃあ次にセシリアの買い物をしよう。
「セシリアは何を買うの。」
「私は休日に着る服を買いたいのですが、どれが似合うのか分かりませんので光さんにアドバイスを貰ってもよろしいですか。」
なるほどね。つまりコーディネイトをしてと言っているのか。
「いいよ。それじゃあ行こうか。」
「はいっ！！」
よっぽどうれしいんだね。僕的にはその速度で僕の腕を引っ張るのをやめてほしいんだけど・・・。

本当に今日はいい日ですわ。なぜなら光さんに服を選んでいただ

けるのですから。
「じゃあここで待ってて。選んでくるよ。」
そう言って入って行ったのですが、恥ずかしくないのでしょうか。
「ラクスさん。相良さんにプレゼントするものを買いたいんですけれど何を買ったらいいのか分からなくて。」
あら？何か話し声が聞こえてきましたわ。どうやら私と同じ境遇の人の話のようです。
「テッサ。人は誰でも贈り物を貰えば嬉しいのですよ。一生懸命に選べば大丈夫ですわ。」
「ありがとうございますラクスさん。」
「どういたしまして。なら一緒に探してあげましょうか。私もキラにプレゼントを差し上げたくなってきました。」
「はい。」
心を込めた贈り物ですか・・・。でしたら私も光さんに何か贈り物をしないと。私は光さんに対する贈り物を買うために探しに行きました。

あれから２０分の間、僕はセシリアの休日に着る服を探していたんだ。４着ぐらい見つけたんだ。だって『Ｇ４』が『！！マスター、女性が着る服ですのでしっかり選ばないといけませんからね。』とか『ここは男性が女性のために買ってあげるものですよ。』っていうんだもん。ところで、『Ｇ４』が人みたいになってきてるのは思い違いだろうか。
会計を済ませて待たせてた場所に行くとセシリアがいなかった。トイレかな。
「すみません！待たせてしまいましたか。」
しばらくするとセシリアが全速力で戻ってきた。あれ、手に何か持ってる。
「それは何。誰かにあげるもの？」

「あの・・・、これは・・・。」
だんだん歯切れが悪くなっていくけどどうしたの。
「まぁこんな時間だし、とりあえず戻ろう。」
「えっ？そ、そうですわね。帰りましょう。」
セシリア、ちょっと顔が赤いよ。風邪でも引いた？
『・・・マスター、帰ったら女心がわかるまで寝させませんよ。』
それだけはやめて～～！！

「あ～～！せっしーとライライが一緒にいる～～。」
学園に戻ってくると同じクラスののほほんさんと出会った。何で寝巻がよりにもってガゾートっぽいの！！着にくくない？？って尻尾が動いてる！！どうなってるのそれ。それに
「セシリアだからせっしーはわかるけど、なんで僕はライライ？」
なんか昔中国からきたパンダの名前に似てるんだけど。
「ライライは名前が光でしょ。光っていう字は英語でライト。だからライライ。」
結構手の込んだあだ名だね。でもあだ名をもらったことがないから嬉しいな。
「じゃあ私は夕ご飯を食べに行くから、じゃ～ね～～。」
そういうとのほほさんはぽてぽてと走って行った。よくあれで走れるね。飛べば早いと思うのは僕だけかな？
「それじゃあ僕たちも荷物を置いて食べに行こうか。」
「・・・は、はい。」
どうしたんだろう。あのときからずっとこんな調子だ。だけど詮索はいけない。僕は自分の部屋に戻るために歩こうとするとセシリアがこう言ってきた。
「あの、今日はありがとうございますわ。お礼としてこれを差し上げます。」
結構早口で言って持っていたものを渡すと、自分の部屋へ早歩き

で帰って行った。なんだろう。部屋に戻って開けてみよう。部屋に戻ってから開けてみると綺麗な置物（名前は忘れたけど振ると中に入っているものがキラキラ舞う置物）だった。僕が選んでいる間セシリアも選んでいたんだ。

「ありがとう。」

僕は無意識にそう呟いていた。

余談だが、食堂に行くと皆からセシリアとどこに行っていたのか聞かれて疲れた。そして『Ｇ４』には女心についての講義を聞いた。僕の休日は色々なことがあって疲れたけど、楽しかった。

第八話　光の休日（後書き）

セシリアが光にフラグを立てたように見えますが、断じてそんなことはありません。

セシリア（以後セ）：そんな・・・。

いやぁ怖かった。書いているうちにこんな風にｎ（目の前をレーザーが掠めた）うわぁ危ない。

セ（ＩＳ装着時）：おほほほ。外しましたわ。次は外しません！

待って！今からお客さんが来るからＩＳをしまって！

セ：（ＩＳを待機状態に戻してから）誰が来ますの？

実はセシリアの中の人ネタで僕の知ってる人が3人いたから、４人で話し合ったら面白いかなって。

フォウ（以後フォ）：すまない。スードリの発進時刻が遅れてしまい遅くなった。

セ：まだ一人しか来ていませんわ。

そうだね。（作者の携帯が鳴る）もしもし、どうしたの。急に任務が入ったから来れない？じゃあ無理だね。次に空いてる日をメールで送っておいてね。（通話を切るとまた掛かってきた）もしもし。えっ、急にデートをすることになった！？じゃあ仕方ないか。（ったく青春満喫するなよ。）ん？なんでもないよ。楽しんできてね。

（通話を切る）今日は４人集まれないからまた今度ってことで。次も楽しみにしてください。

セ＆フォ：来た意味がないですわ（じゃないか）！！

第九話　ＩＳ学園の授業風景（前書き）

【『Ｇ４』の説明が追加されました。】

いやぁ。久しぶりの投稿ですな。

テ：今回はユニコーンか。

言っとくけど、ＮＴ－Ｄはまだ発動させないからね。

一：なんだそれ？

箒：ユニコーンだけに搭載されているのか？

簡単に言うと、各ユニットに１つだけシステムを組み込めるようになっているん

だ。因みに『ガンダム』には本来搭載されていないＡＬＩＣＥシステム、『スト

ライクフリーダム』にはマルチ・ロックオン・システム、『ダブルオーライザ

ー』にはトランザムバーストシステムが組み込まれているんだ。

Ｇ：なんだかんだでＩＳ超えてます！！

だって元ＭＳなんだもん。ってなわけで第九話始まります。

テ：チートキターー！！

第九話　ＩＳ学園の授業風景

「ではこれよりＩＳノ基本的な飛行操縦をしてもらう。織斑、古代、オルコット。試しに飛んでみせろ。」

僕がクラス代表になってから早１週間。その間自分のＩＳ操縦能力をあげるために、日々一夏や箒と一緒に訓練した。たまにセシリアとも訓練したけど。そのお陰か、わざわざ初期形態にならなくても他のユニットになれるようになった。でもやっぱり変身ポーズをとらないと装着出来ないのは何でだろう？

「古代、集中しろ。」

すっかり忘れてた！！早く装着しないと。僕は変身ポーズ（以後省略）をとってＩＳを装着する。今回はユニコーンだ。セシリアは待っててくれたが、一夏はまだ装着させていなくて僕が装着して少したって装着した。

「遅い。古代はともかく０．５秒で展開出来るようにしろ。」

余談だが、代表決定戦の後自分のＩＳについてさらに説明して、展開方法の特殊さを伝えると、織斑先生はしぶしぶわかってもらった。

ノアさん、僕にＩＳをくれるのは嬉しいですが、展開方法が普通なのをください。

「あら？私と戦った時のフォルムではありませんわ。」

「仕様です。気にしないで下さい。」

「でもライライ、そのポーズ格好良かったよ～～。」

前言撤回。このままがいいです。

「よし、飛べ。」

ＩＳはＰＩＣで空中を自在に飛べるけど、起動させるのに時間が掛かるから、僕はいつも地を蹴ってジャンプしながら起動させるんだ。だから他の２人よりスタートが早いんだ。スペックでも２人より上だしね。しばらくすると、前からセシリア、一夏の順でやって

来た。・・・一夏ったら、まだ飛び方をマスターしてないの？
「一夏、飛び方のイメージを掴めてる？」
「あぁ。『前方に角錐を展開させるイメージ』ってやつだろ。わかっちゃいるんだけどな。」
「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分のわかりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ。」
そうだよね。僕も初めて飛んだときなんかあっちいったりこっちいったりして・・・。それで皆に教えてもらって・・・。あの頃は楽しかったなぁ・・・。
「お前たち、いつまでそうしているつもりだ。はやく急降下と完全停止をやってみせろ。」
思い出にふけっていると、織斑先生からそう言われた。あの人の出席簿アタック（一夏命名）は恐いから、はやく行こう。
「それじゃ一夏、セシリア。僕は先にいくね。」
僕は皆の所まで急降下していく。完全停止にはＡＭＢＡＣシステムを使えばいいから、結構簡単だね。

はじめまして、１－Ａ副担任の山田真耶です。今ＩＳの操縦訓練の監督をしています。新しく転入してきた古代君の専用機は特殊のようで、４つのユニットから１つを選んで展開するようです。私と戦った時の『ガンダム』（あの時は格好ｙ・・いえ／／そうでは・・でも・・な／／何でもありません）、オルコットさんと戦った時の『ストライクフリーダム』、そして今回の『ユニコーン』ですが後１つはなんでしょう？それにしても古代君の専用機は全身装甲（フルスキン）なので古代君の体全体を隠してしまいますね。古代君は格好良いのに勿体ないです。あっ、ほ／／本当に何でもありません／／。あっほら、織斑君、古代君、オルコットさんが急上昇しましたよ。織斑君はまだ飛び方をマスターしていませんが、素質があるからまだまだ伸びそうです。オルコットさんは基本がなっています。流石は代表候補

生です。古代は・・・、はうぅ。やっぱり格好良いです。
「お前たち、いつまでそうしているつもりだ。はやく急降下と完全停止をやってみせろ。」
織斑先生の声で正気を取り戻した私は、高速で降下してくる古代君が見えました。本来なら地面と激突するのに、途中で姿勢制御して、地面から３ｃｍすれすれの所で止まっていました。良かったぁ、地面と激突しなくて。

これがＡＭＢＡＣシステムか。流石は宇宙世紀だね。次にセシリアが降下してきて５ｃｍの所で止まった。最後に一夏だけど、考えてた通りに地面と衝突して笑いを取ってた。あれで素なんだけどね。
「馬鹿者。誰が地面に衝突しろと言った。地面に穴を開けてどうする。」
ごもっともです。誰が整備するのってくらいの大きさだし。僕も手伝わされるのかな？
「織斑、武装を展開しろ。それくらいはできるようになっただろう。」
「は、はぁ。」
「返事は『はい』だ。早く始めろ。」
「は、はい。」
・・・一応ここは学校だよ。先生にタメ口はだめ。学習してよね。話は変わるけど、一夏の専用機は『白式』（ユニコーンほど白くない）で、近接ブレード『雪片弐型』しかない。それを０．７秒で出した。
「遅い。０．５秒で出せるようになれ。」
先生、これでもまだましですよ。僕と練習しているときは殆ど展開できなかったんですから。
「次に古代、ライフルを展開しろ。」
・・・それならビームマグナムはだめだな。だったら『ガンダム』

のライフルを応用しよう。ライフルをイメージして、展開する。もちろんセーフティは外してますよ。
「よし、合格だ。次にセシリア、武装を展開しろ。」
「はい。」
セシリアはそう言うと腕を横に突き出して爆発的に光らせると、その手には狙撃銃『スターライトＭＫ？』が握られていた。それはいつでも撃てるようになっていてってセシリア、銃口がこっち向いてる。危険！！危険！！
「流石だな代表候補生。・・・ただし、そのポーズはやめろ。横に展開して誰を撃つつもりだ。正面に展開できるようにしろ。」
「で、ですがこれは私のイメージをまとめるために必要な「直せ。いいな。」・・・はい。」
怖いです先生。たぶんゾイガーでも逃げ出します。
バシィィン！！
「古代、今失礼なことを考えていなかったか？」
「・・・すみませんでした。」
すっかり忘れてた。僕って考えていることが顔に出るんだった。
「全く。今日はここまでだ。織斑、グラウンドの整備をしておけよ。」
そう言うと先生は足早と去っていった。皆も帰っていく。・・・わかったよ。手伝うから雨の日に段ボール箱の中にいる子犬のような目で見ないで。

第九話　ＩＳ学園の授業風景（後書き）

本来ならここで織斑千冬さんに来てもらう予定でしたが、敵陣営と話せる機会もありませんのでここはアルケーこと、アリー・アル・サーシェスさんに来てもらいました。

サ：おめーが光って奴か。

光：初めまして。ここでは思ったことを話していただけると嬉しいです。

サ：そうなってるんだな。じゃあいうぞ。クルジスのガキはでるのか？

光：残念ながら出ません。そのかわりガンダムはいっぱい出るそうですよ。

サ：そうかい。それは楽しみだな。

光：そういえばサーシェスさん。フロンタルさんとは何時知り合ったのですか？

サ：そこの作者にでも聞いてみな。

ちょっと！僕に振らないで。たしかに知ってるけど、今じゃない。

光：ちゃんと教えてよ。

ちゃんと教えるから。・・・っと今日はここまでか。サーシェスさん有難うござ

いました。明日はこの調子じゃあの人が来るかも・・・。

光&サ：感想待ってます（るぜ）。

第十話　クラス代表パーティー（前書き）

連続投稿キターー！！

セ：作者ったらさっきからこんな調子ですの。

光：大丈夫。いざとなったら・・・ね。

真：古代君、怖いですぅ。

千：・・・古代、お前黒いな。

それでは第十話　発進しまーす。・・・あっ、そういえば僕ってそんなにフォー

ゼ好きじゃないかも。

光&セ&真&千：だったら（でしたら）言うな（言わないで下さい（まし））ー

ー！！

第十話　クラス代表パーティー

「というわけで！古代君、クラス代表決定おめでとう！」
「おめでと～」
今の時間は夕食後の自由時間。本来は一夏のために用意していたらしいが、僕が代表になってしまったせいで急遽僕の『クラス代表就任パーティー』になったのだ。本当にごめん。実際に用意してきた人たちに謝ってきたけど、写真を撮ることでおあいこになった。いいのかなこれで・・・。話は変わるけど、どう見ても1組じゃない人も混ざってるよね。クラスってだいたい３０人だけど、ここにいる人やっぱり３０人以上だよ。
「はいは～い。写真部で～す。話題の新入生、織斑一夏君と古代光君に特別インタビューをしに来ました。」
なんか待ってましたとばかりにやって来たけどこの人は誰？
「あっ、私は2年の黛薫子。よろしくね。新聞部部長をやっています。はいこれ名刺。」
『なんか騒がしい人が来ましたね。マスター、どうします？』
『インタビューしたいって言ってるからしてみたいな。いいよね。』
『マスターがしたいと言うのでしたらいいですが、くれぐれも私のことを聞かれたら抽象的に説明して下さい。』
まあ、それはわかってるけど。・・・やっぱり人間味が増してきたね、『Ｇ４』
「ではでは次に古代君。クラス代表になった感想をどうぞ！」
いきなりですか。・・・そうですね・・・。それなら。
「皆の期待に答えられるように頑張ります。」
「うわぁ、見事に完璧なコメント。こりゃ捏造する必要ないな。」
捏造する気だったんですか。なんて恐ろしい。・・・一夏、その様子だと捏造されること確定してるんだね。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい。」
このままだとセシリアも捏造されるかも・・・。
「私、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね。」
『とか言いながらオルコットさん、やる気満々ですね。』
たしかにそうだね。身だしなみも気にしちゃって。
「コホン。ではまず、どうして私がクラス代表を辞退したかというと、それはつまり「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい。」さ、最後まで聞きなさい！」
あ～あ、捏造されちゃった。それにしても先輩、その返し方は流石にひどいです。・・・後でセシリアが言いたかったことを全部聞いてあげよう。
『私も連れていって下さいね、マスター。』
よし、今日セシリアの部屋に行くか。
「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、初めは織斑君に惚れてだけど、前回の試合で古代君に惚れたからってことにしよう。」
なんて壮大な捏造の仕方なんだろう。まかり間違ってもあり得ないでしょ。ほら、セシリアだって顔を真っ赤にして驚いてるじゃん。
『マスター、本当に罪深い人です。』
なんで？どこが罪深いの？犯罪なんてしてないよ。
「はいはい、とりあえず3人共並んで。写真撮るから。」
「な、何でですか？」
3人で並んだところで、何があるって言うの？
「注目の専用機持ちだからねー。それじゃあ、古代君を中心にして2人が古代君をサポートするように左右に並んで。あ、3人で握手したらもっといいかもね。」
なるほど、つまりは広告塔みたいな感じかな。つまりそれって目立つってことだよね。・・・只でさえクラスの皆から言われてるのに。
あれ、セシリアと先輩何の話をしてるんだろう。あっ、セシリア

が先輩に強引に連れて来られてきた。そのまま3人で手を繋ぐと、中から僕、セシリア、一夏の順になる。
「３５×５１÷２４は。」
フフフ。先輩、僕を嘗めないで下さい。
「７４．３７５。」
そう言うと、シャッターがきられた。思ったけどなんでこんなややこしい計算をさせるの？
「スゲーな光。俺全然わからなかったぞ。」
「一夏。だいたいの人はわからないよ普通は。」
わかるんだったら、その人は頭の中が電卓の優等生か、超人ぐらいでしょ。・・・僕の場合は後者だけどね。
『マスターが特別なんです。他の人たちと一緒にしないで下さい。』
『えっ、そうなの。僕てっきり超人は凄いって思ってたけど。』
『・・・マスター、もしかして天然ですか？』
『それはないと思うけど。』
・・・とまぁ、こんな感じでパーティーは１０時まで続いた。セシリアが僕とツーショットを撮ろうとしてクラスの皆に詰め寄られていたけど、どうしたの？
余談だが、その後光はセシリアの部屋に行って2時間ほど話を聞いてあげた。

第十話　クラス代表パーティー（後書き）

今回のゲストはサーシェスの良き理解者、フル・フロンタルさんです。

光：初めまして。古代光です。

フ：こちらこそよろしく。

光：何か聞きたいことがあったら話してください。

フ：なら聞こう。君はこの世界でハーレムになる予定なのだな。

光：不本意ながら、その通りです。

フ：君がそうなるのなら、私たちにも好きな人が出来るのか。

光：こればかりは作者に聞かないと。どうなの？

・・・実は迷ってるんだよね。その件。

光：そうなの！？

フ：興味深いな。聞かせてもらおう。

残念ながらまだこれは案だからまだ公開できないんだ。

フ：残念だ・・・。

何とか確定案にしてみるよ。っと今日はここまで。次回は中国から来るあの転校

生が登場。お楽しみに。

光&フ：感想待っています（いる）。

第十一話　転校生はセカンド幼馴染　新任先生は転生者！？（前書き）

第十一話投稿しまーす！！

テ：・・・自分の小説を自分で読んでて、恥ずかしくないの？

G：それはそれでどうかと・・・。

いいじゃん別に、読んだって。

一：ところで新任先生って誰だ？

じきにわかるよ。それではスタートゥ！！

第十一話　転校生はセカンド幼馴染　新任先生は転生者！？

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。入学からの数週間で、それなりに女子とも話せるようになったのは大きな前進と言えるだろう。光がいるとはいえ、クラスでひとりぼっちとか、普通に寂しいからな。

「転校生？今の時期に？」

今はまだ４月だ。なんで入学じゃなくて、転入なのだろう。しかもこのＩＳ学園、転入はかなり条件が厳しかったはずだ。試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになっている。光は日本の政府が推薦しているようで、試験も受かってるらしい。話を戻すが、つまりは――――

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ。」

「ふーん。」

そういえば、光のやつ何やってんだ？さっきからずっとパソコンを使って何かをしてるんだが、俺たちが見ても何かの設計図っていうことしかわからない。しかも光は集中してるから聞こうにも聞けない。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい。」

あれ、さっき光の席に行ったはずの箒が、気がつけば側にいた。さすがに箒も女子、噂に敏感と言うことなのだろうか。

「どんなやつなんだろうな。」

代表候補生っていうからには強いんだろう。光は結構強いけど、同じくらいなのか？そうだったら俺ももっと鍛えないとな。

「む・・・・気になるのか？」

「ん？　ああ、気になるな。」

「ふん・・・・。」

聞かれたことを素直の答えたら、なぜか箒の機嫌が悪くなった。なんだろう、最近やたらと機嫌が悪かったり良かったり、忙しいやつだ。情緒不安定なのか？

「代表候補生で思い出したけど、光大丈夫か？来月にはクラス対抗戦があるだろ。」

「そう！そうですわ、光さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。相手ならこの私、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ。」

「うーん、そうだなぁ。でも、一夏とも実践的な訓練をしたいな。」

たしかにそうだな。他のクラスメイトじゃ、訓練機の申請と許可、整備に丸一日かかるから、手っ取り早く模擬対戦するなら専用機を持ってるやつに頼むのが早い。

ちなみにクラス対抗戦とはクラス代表同士によるリーグマッチだ。本格的なＩＳ学習が始まる前の、スタート時点でも実力指標を作るためにやるらしい。

また、クラス単位での交流及びクラスの団結のためのイベントだそうだ。

やる気を出させるために、一位クラスには優勝賞品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。なるほど、女子が燃えるわけだ。ちなみに光の場合はご飯大盛り半年フリーパスになってるらしい。

「皆のためにも、頑張ってくるからね。」

「是非とも優勝してくださいまし。」

「同じクラスの仲間として応援してるぞ。」

「古代くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ。」

光なら絶対優勝しそうだな。もしかしたら千冬姉と同じくらい強いかもな。

「古代君、がんばってね。」

「フリーパスのためにもね。」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ。」
「4組だけ？なんか物足りないな。」
・・・・・光って凄いのかよくわからないな。
「その情報、古いよ。」
ん？教室の入り口からふと声が聞こえた。なんか、すげぇ聞いたことのある声だが・・・。
「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから。」
腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは・・・。
「鈴・・・？お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音（ファン・インリン）。今日は宣戦布告に来たってわけ。」
ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。
「何格好付けてるんだ？すげぇ似合わないぞ。」
「んなっ・・・！？なんてこと言うのよ、アンタは！」
おおやっと普通に喋った。なんださっきの気取ったしゃべり方は。軽く引いたぞ。
「鈴音、いつまで1組にいるつもりだ。今日のＳＨＲは長くなるのだから、早く戻ってこい。」
ん？また教室の入り口から声が聞こえた。また懐かしい声だな。気になったから見てみるとそこにいたのは・・・。
「グ、グラハムさん！！どうしてここにいるんですか。」
そこにいたのは、3年前アメリカの空軍に入隊したはずの千冬姉の幼馴染みのグラハム・エーカーさんだった。
「ここではエーカー先生だ。以後間違えるなよ。」

第十一話　転校生はセカンド幼馴染　新任先生は転生者！？（後書き）

一：まさかグラハムさんだなんて。

グラハム（以後グ）：久しぶりだな、一夏。

光：こんな風になるのなら、もしかしたら色々な人が飛ばされてくるかも。

・・・・・ニヤリ

箒：何か変なことでも考えていないか？

な、何のことでっしゃろ。

光：バレバレだ！！

とりあえず次回はグラハムさんの説明に入りまーす。

光：話をそらすな！！

第十二話　第２の転生者（前書き）

今回は２人目のＩＳ世界にやってきたグラハム・エーカーさんの生い立ちだ！！

グ：上手に説明してくれると助かる。

それではどうぞ。

第十二話　第2の転生者

初めましてだな。私の名前はグラハム・エーカー、未来への水先案内人だ。ＥＬＳとの戦いで死んだ私はあの世に行くものだと思っていた。

――想像していたのと違うな。カタギリ司令の掛け軸には『三途の川』があったのだが・・・。

私的には天国か地獄に行くか、もしかしたらハワードやダリル、エイフマン教授が迎えに来るものだと思っていた。そうならなかったことに少しだけがっかりする私とは一体・・・。

「君が来ることを待っていた、グラハム・エーカー。」

――誰だ。

「すまない。私の名前はノア。ある世界の『神』と呼ばれる存在だ。」

なんと！！私は嬉しいぞ、少年。ガンダムには振り向いてもらえなかったが、神に会うことが出来たぞ。

「考え事の最中にすまないが、頼みたいことがあるのだ。」

何？頼み事だと。神ともあろう存在が私に何を頼むのだ。

「実はある世界に本来あってはならない存在が出現した。私が違う世界に介入すると世界が壊れる可能性がでてきてしまうため、私では出来ないのだ。だから頼む、私の代わりにその世界に跳んだある少年の手助けをしてもらいたい。」

――なるほどな。ふっ、私も人の子だ。その頼み、このグラハム・エーカーが引き受けた。

「助かる。そうと決まればすぐ跳んでもらうぞ。」

そう言うと神は手刀で空間を歪ませ、そこに私を押し込んだ。なんと強引な！

「頼んだぞ。」

・・・何はともあれこのグラハム・エーカー、全力を尽くすのみ

だ。

この調子だと、この回の全てを使っても表せないのでダイジェストで伝えようと思う。

・私グラハム・エーカーはこの世界に赤ん坊として生を授かった。

・４歳の頃に織斑千冬と出会い、仲良くなった。その時篠ノ之束とも仲良くなった。

・小学校、中学校も千冬や束と共に登校した（私はこの２人のペースについていけなかった）。

・束がＩＳを開発して、束は姿をくらまし、箒たち篠ノ之家族とは連絡がとれなくなった。

・日本海沖で『白騎士事件』が発生。ＩＳの力を世界に示した。その後に、世界各国でＩＳ開発に乗り出した。

・千冬がＩＳ学園に入ったとき千冬の両親が千冬と一夏の２人を捨てた。その２人の行動に激怒した私は両親に頼み、２人をサポートするようになった。

・第一回モンド・グロッソ大会で優勝、幼馴染みとして私はとても嬉しかった。

・第二回モンド・グロッソ大会で決勝戦間近に一夏が誘拐される事件が発生。千冬は一夏を助けるために試合を棄権し、大会二覇は不意になってしまった。その時、私にも力があればと思った私がいた。

・その力を見つけるために今から３年前にアメリカに飛び、空軍に入隊した。

そして現在、私は神のおかげでＩＳ学園の教師として入ったのである。その際、神から少年の名前を教えてもらった。古代光というそうだ。

「それではＳＨＲを始める。全員起立。」
こうして私の教師人生が始まったのである。

第十二話　第2の転生者（後書き）

今回は敵と話をしよう第3弾！！ゲストは今はまだ謎に包まれている？？？さんだ。

光：初めまして。

？？？：今回はゲストとしてきたぞ。

光：それでは質問します。自分を何かに例えるならなんですか？

？？？：簡単に言えば悪魔だな。難しく言うと、目的のためなら手段を選ばない

極悪非道の機械だな。

光：なるほど。ありがとうございます。

今回はこれで終了。次回は昼休みからスタートゥ！！

光&？？？：感想を待ってます（待っている）。

第十三話　昼休みの出来事（前書き）

更新だあぁ――！！

光：とうとう原作1巻の後半に来たね。

G：やっとですか・・・。

失礼な。これでも頑張ってるんだよ。

グ：とにかく続きを頼む。

それじゃあ第十三話始まり。

第十三話　昼休みの出来事

しかし、さっきの先生（たしかグラハム先生だったかな）とても格好良かったな。世の中には色々な人がいるんだな。

「大丈夫です。マスターも格好良いですよ。」

「たしかにそうだな。俺から見てもなかなかの美形だぜ。」

今は昼休みで一夏や箒、セシリアと一緒に食堂に向かっている。でも、『G４』や一夏がそう言ってくれると嬉しいな。・・・その言葉を箒に言ってあげるとどれだけいいか。

「待ってたわよ、一夏！」

食堂に着くと入り口にラーメンの入った丼が置いてあるトレー（元ウルトラマンの僕は視力はいいんだ）を持った鳳さんがいた。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ。」

「う、うるさいわね。わかってるわよ。」

やっぱりこの２人は仲がいいね。まるでシンジョウ隊員とホリイ隊員みたい。・・・僕はあの世界を救えたんだよね。

「光さん、どうされました？」

「あ、セシリア。なんでもないよ。」

ごめんね。昔のことを思い出してたから。

そうこうしていると、一夏は日替わり定食、箒は焼き魚定食、セシリアはシーフードパスタを選んでいた。僕は納豆定食ご飯大盛りだよ。一度納豆を食べたいなと思ったんだよね。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸１年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ。」

「どういう希望だよ、そりゃ・・・。」

なんだろう。いつまで見てても飽きないな。

「ところで、アンタのクラスの代表変わったんだって？」
「ああ、俺のとなりにいる光が今の代表だ。」
僕にふるの？まあ、友達になりたいからね。
「はじめまして。古代光です。今後よろしくね。」
「よろしく。」
鳳さん、箒と同じで一夏にゾッコンなんだね。
「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが。」
そうだよね、箒。自分の片思いの相手が他の女子と仲良くしてるのが、面白くないんだよね。
「もしかして、２人は付き合っているのですか？」
いやそれはってこら『Ｇ４』。また人前で喋って。
「い、今誰が喋ったの？ねぇ、誰よ。」
はぁぁぁ。また説明しないといけないのか。
「鳳さん。今喋ったのは僕のＩＳ。ほら、自己紹介して。」
「はい、マスター。はじめまして。マスターのＩＳ、『Ｇ４』です。」
「鈴。言っておくが光のＩＳは特別だから喋れるんだ。分かってくれよ。」
「そ、そうだったんだ。ふぅ。」
・・・もしかして、お化けが怖いのかな。シンジョウ隊員みたいだな。・・・シンジョウ隊員。
「さっきからどうした？なんか変だぞ。」
「ごめんね。今はもう会えない人のことを思い出したから・・・。」
イルマ隊長、ムナカタ副隊長、シンジョウ隊員、ホリイ隊員、ヤズミ隊員、ヤナセ隊員、ダイゴ隊員。皆今何をしてるのかな。
「すまん光。そうとは知らず。」
「いや、ただ今は遠いところにいるから会えないってことだから。」
勝手にＧＵＴＳの皆を殺さないでよ。

「へくしゅ。」
「ダイゴ、風邪か？」
「ダイゴ、体調管理をしっかりしろよ。もう怪獣がでないって訳じゃないからな。」
「分かってるよ。」
「ダイゴ、無茶はしないでね。」
「ありがとう、レナ。」
「チクショー。いいなコノヤロー！」

「話は逸れたけど、一夏と鳳さんの関係は何？」
「ああ、ただの幼馴染みだ。」
なんでそうあっさり言っちゃうの？箒は怪訝な顔してるし、鳳さんなんか睨んでるし・・・。全く罪深いやつめ。
「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小４の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのが小５の頭だよ。で、中２の終わりに国に帰ったから、会うのは１年ちょっとぶりだな。」
なるほど、だから箒と鳳さんは面識がないのか。
「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染みで、俺の通ってた剣術道場の娘。」
「ふうん、そうなんだ。」
ちなみに僕は納豆を混ぜながらこの話を聞いている。やっぱり納豆ってこのネバネバが美味しいんだよね。
「初めまして。これからよろしくね。」
「ああ、こちらこそ。」
もし超人としての力があったなら、２人の間には火花が散ってるだろうね。
「あれ？」

「どうしたの一夏？」
「あそこにいるのって、千冬姉とグラハムさんじゃねえか？ほらあそこ。」
どれどれ。あ、本当だ。織斑先生とエーカー先生が仲良く食事してる。はたから見ると、恋人同士に見えなくもないね。
「やっぱりあの2人は仲が良いわね。」
「そうだな。いつ見てもお似合いだよな。」
そうなんだ。そうすると、もしかしたらっていう展開があったりして・・・。
「ンンンッ！私の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」
・・・すっかり忘れてた。エーカー先生に夢中になってセシリアを紹介してなかった（滝汗）。
「・・・誰？」
「ま、まだ紹介してなかったよね。イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんだよ。」
「ふうん、よろしく。」
「な、なんて態度ですの！い、い、言っておきますけど、私あなたのような方には負けませんわ！」
「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん。」
まあ見た目で判断するとろくな目にあわないからね。例えばガゾートとか？あれは精神的に危なかった。だって食べられそうになったんだもん。
「・・・・・。」
「い、言ってくれますわね・・・。」
どうやら鳳さんの強い発言が2人とも聞き捨てならなかったようだね。
『何食わぬ顔でメシを食う・・・なんつって。』
「一夏。そのギャグは寒いよ。親父くさいよ。」
「なんで光分かったんだ！？」

なんでって言われてもねえ・・・。
「古代少年、少し良いかね。」
あれ？エーカー先生、どうしたんだろう。僕に用事かな？
「エーカー先生、どうしました？」
「２人だけで話がしたい。屋上に来てもらえるか？」
「はい、わかりました。」
「では待っている。」
そう言うとエーカー先生は行ってしまった。本当にどうしたんだろう？
「光、どうして呼ばれたんだ？」
「僕にもわからないよ。」
とりあえずわかったのは、この定食を完食することだった。

余談だが、光は納豆定食を昼休み１０分前に食べ終わったらしい。

第十三話　昼休みの出来事（後書き）

突然ですが、光のＩＳ『Ｇ４』をどれだけ知ってるかクイズを出しまーす。

一：ホントに突然だな。

光：今に始まったことじゃないけどね。

箒：私も参加するのか。

セ：頑張りますわ。

それじゃあ問題。『Ｇ４』の単一仕様能力は何だ？

一：たしか『モビル・チェンジ・システム』だろ？

正解。次行くよ。ユニットの数及びその名前を完答せよ。

箒：ユニットは４種類で、『ガンダム』、『ストライクフリーダム』、『ユニコーン』、そして・・・。

セ：『ダブルオー』ですわ。

惜しい。正解は『ダブルオー』じゃなくて『ダブルオーライザー』。まあ、これくらい出来るんだったら問題ないね。

光：もしかしてまたいつかクイズをするの？

そのつもりです。その時はほかの挑戦者を連れてきます。

クイズはここまでです。皆さん出来ましたか？次回もお楽しみに。

光：あれ？僕の必要性って・・・？

第十四話　ファーストコンタクト（前書き）

ティガカッコイイ！！（ウルトラマンティガ第２８話視聴中）

一：作者は何を見てるんだ？

箒：特撮みたいだな。

光：（あれって僕だよね。別次元の僕かな？）

Ｇ：（だといいですね。）

視聴し終わったから、始まりまーす。

一＆箒＆光＆Ｇ：自由奔放すぎる！！

第十四話　ファーストコンタクト

「待っていたぞ、古代少年。」
急いで屋上にいくと、エーカー先生だけが屋上にいた。
「すまない。どうしても君に伝えたいことがあったのだ。」
「先生、それはなんですか？」
どうしても伝えたいことか。気になるな。
「私グラハム・エーカーはこの世界の人間ではない。」
・・・はい？
「君と同じ、神によってこの世界にやって来たのだ。神から君のことは聞いている。」
「もしかして、ノアさんにあったのですか？」
「ああ。君のサポートを任せてもらっている。」
「そうだったんですか。」
ノアさん、どれだけの人をこの世界に連れて来れば気が済むのですか。
「それでは本題に入ろう。」
えっ？今までのは他愛のない話だったの？
「私専用の機体を作って欲しい。」
な、何ですとーー！
「神から君の技術力を聞かされたが、その技術力があれば私にも力が持てるかもしれないと思ったのだ。だから、私専用の機体を作って欲しい。頼む。」
そう言うとエーカー先生は土下座をして頼んできた。
「先生、顔を上げてください。」
「しかし「心配しなくてもちゃんと作りますよ。」かたじけない！」
先生は男だから、ＩＳに適性はない。だから僕に頼んできたんだ。その気持ちはよく分かります。僕だって皆を救える力が欲しいんで

すから。
「待っていてください。クラス対抗戦が終わったらお渡しします
ね。」
「わかった。楽しみにしてるぞ。」
僕は挨拶すると、自分のクラスに戻った。さぁて、１から設計す
るか。

私は古代少年の背中を見ながら、彼のことを思い出していた。初
めはガンダムに依存していたが、仲間のことを大切に思うようにな
り、最後は宇宙からの生命体と対話をして人類を救ったソレスタル・
ビーイングの少年。
「古代少年、今の君の目はあの少年に似ている。仲間を大切にし
ていたあのときの目に。」
グラハムの呟きは風に乗って誰にも聞こえなかった。

第十四話　ファーストコンタクト（後書き）

グ：本当に頼んだぞ、古代少年。

光：わかりました。エーカー先生。

G：ノアさんは何故エーカー先生の専用機を用意してくれなかったのでしょう？

ノア（以後の）：私とて万能ではない。

そうだよ。神様だって絶対じゃないんだからね。

ノ：そろそろ時間だな。

そうですね。それでは次回もお楽しみに。

第十五話　始動『ダブルオーライザー』（前書き）

ディケイド最高ーーー！！

サ：あいつどうした？

フ：何でも他の作者の小説を見て、そう感じたらしい。

？：とりあえず十五話、見てくれたまえ。

第十五話　始動『ダブルオーライザー』

「え？」
エーカー先生との話の後、一夏から第３アリーナでＩＳ操縦を教えてもらいたいと言われたから、今第３アリーナにいるんだけど・・・。
「な、なんだその顔は・・・おかしいか？」
「そ、そうですわ。おかしくはないと思いますの。」
一夏、呼んだのは僕だけだよね。なんで箒とセシリアがここにいるの？しかも箒はＩＳ『打鉄』（僕は初め『だてつ』って読んでた）を装備、展開していた。ちなみに『打鉄』は、純国産ＩＳとして定評のある第２世代の量産機なんだ。それにしてもなんだか『ガンダムＯＯ』の『マスラオ』に似てるな・・・。あっ。
「あれなら先生も喜んでくれるかな。」
「どうした、光？」
「えっ？あ、いや、なんでもないよ。ハハハ・・・。」
いやぁ、危ない危ない。声に出してたよ。
「それにしても、どうしてここにいるの？」
「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ。」
「そして私は箒さんが一夏さんと訓練している間、光さんと一緒に訓練しようと思いましたの。」
なんだそうだったんだ。たしかに効率がいいからね。
「そうだね。だったら一夏と箒はあっちで訓練してて。僕たちはこっちでやるから。」
「わかった。じゃあ箒、いくぜ。」
「ああ。」
うん、やっぱりこの２人には付き合って欲しいな。なんかダイゴ隊員とヤナセ隊員みたいなんだもん。結婚式には呼んでね。
「それじゃあセシリア。僕たちもやろうか。」

「わかりましたわ。光さんも全力でやってくださいまし。」
まあ、慣れるためにもダブルオーで頑張ろうかな。
「来い、ダブルオー！」
変身ポーズをとって『Ｇ４』を展開、ダブルオーライザーを装着した。・・・同調率１００％、いける。
「それが光さんのＩＳの４つ目の姿ですね。」
「そう。これが僕の４つ目のユニット、ダブルオーライザー。」
両肩のＧＮドライブからＧＮ粒子を出しながら飛翔する。
「ダブルオーライザー。これより訓練を開始する！」

結果は辛勝だった。原因は機動力。『ストライクフリーダム』同等の速さで移動するため、まだ体が慣れないからよく被弾しちゃった。だけど想像以上の攻撃力で圧倒できたからまずまずかな。
それにしても、さっきの感覚はなんだったんだろう？あのときは動きが読めただけだったが、今回はなぜか皆の声が聴こえてきたんだよね。まあ、気にすることでもないか。
「今日はここまでだね。」
「そうですわね。」
今は夜の８時。そろそろいかないと。
「光さん。夕食を御一緒してもよろしいですか？」
「いいよ。でもでもそんな一緒に食べれないよ。」
「かまいませんわ。」
「じゃあ、行こうか。」
ご飯を食べたらやらなきゃいけない事もあるしね。

あの後夕食を食べた僕は、部屋に戻ってＩＳモドキの製作にはいった。
「『Ｇ４』、『スサノオ』の設計図ってある？」

「なぜですか？」
「ほら、エーカー先生の専用機を造るためだよ。」
「なるほど。それなら提示しますね。」
よし造るぞ。まずは動力機関を作ろう。本来は疑似ＧＮドライブだけどオリジナルでいこう。えっ？あるの？ならいいか。それじゃあボディはこうして・・・・・。
あれからどれくらい経っただろうか。まだ完成してないけど、コンピュータや必要な回路は出来てるから、今日はここまでかな。でもこれを見られると困るしな。よし、段ボールの中にしまって隠しておこう。
ーーーーーーーーーー
完了っと。ふぅ、汗をかいたな。シャワーでも浴びよう。
そうして光はシャワールームに入っていった。

「な、なんて格好してんのよアンタ！」
「なんでって、シャワー浴びてたんだから仕方ないでしょ。」
どうなってるの。たしかに今日からルームメイトが来るって数日前に山田先生から教えられていたけど、まさか鳳さんだなんて。
「ま、まあいいわ。それよりも一夏の部屋ってどこ？」
「たしか隣だったけど、なんで？」
「一夏のルームメイトと部屋を変えてもらうためよ。」
そういいながら、鳳さんは出ていった。一度会ったけど、嵐のような人だな。ん？たしか一夏のルームメイトって・・・。部屋替えはたぶん無理だね。
「ハロ、ヒカル。ゲンキカ、ヒカル。」
「ハロ、僕はいつも元気だよ。」
あぁ、この子は『ハロ』。僕の作ったロボットなんだ。さっきまで隅にいたけど鳳さんは気付かなかったみたいだね。
なんだか騒がしくなってきた。たぶん、箒と鳳さんが言い争って

るのかも。
「あの２人は織斑一夏のためなら、死闘を繰り広げそうですね。」
「『Ｇ４』！本当にしそうだからそういうこと言っちゃダメ。」
しかし、『Ｇ４』の言っていることはあながち嘘ではないことを、１人と２つは知らなかった。

第十五話　始動『ダブルオーライザー』（後書き）

久しぶりに光の部屋を再開します。今回のゲストは織斑先生だ。

光：お久しぶりです織斑先生。

千：ここでは織斑さんでいい。

光：では織斑さん。ズバリ好きな人はいますか。

千：な／／／。なぜそのような質問を。

光：僕的に気になります。教えてください。

千：うっ。・・・ここだけだぞ。

（織斑さん、光に暴露中・・・。）

光：そうだったんですか。わかりました。

千：くれぐれも内密にな。

そんなわけで織斑さんが暴露したところでお時間が来たようです。

次回もお楽し

みに。

光&千：感想待ってます（いる）。

第十六話　光のルームメイト（前書き）

今回亡国企業の幹部の３人が最後に登場。

光：誰です？

Ｇ：どうやらこの物語のカギを握っているみたいですね。

それでは十六話スタート

第十六話　光のルームメイト

結果を言うと、ダメだったみたい。しかも鳳さんは泣きながら帰ってきたんだ。

話によると、どうやら一夏が昔約束していた内容をはき違えて覚えていたらしく、それが気にくわないみたい。とりあえずいい子いい子したら、鳳さんの顔を赤くなった。大丈夫だよね。

「ダイジョウブカ。ダイジョウブカ。」

ハロは鳳さんのことが心配なんだね。

「少しは楽になった？」

「あ／／／ありがとう。もう大丈夫だから。」

なら問題ないか。でも一夏ってわざとやってるようにしか見えない時があるよね。それはともかく

「鳳さん。鳳さんはこれからどうしたい？」

「わ、私は一夏に謝ってもらいたいけど。」

なるほどね。鳳さんは一夏が昔した約束の本当の意味を思い出してそのことについて自分に謝ってもらいたいと考えているわけなんだね。

「それなら、自分からその約束の本当の意味を伝えて、謝ってもらえばいいと思うよ。」

「たしかにその方がどちらもすっきりして仲直り出来ますしね。」

これで一件落着かな。

「そ、そんなのできるわけないじゃない。」

「どうして？その方が早く解決するのに・・・。」

「・・・ああ、なるほど。そういうことですか。それなら、無理もないですね。」

「い、今ので何がわかったの？教えて『Ｇ４』。」

「これだけは無理です。自分で考えて下さい。」

自分で考える？う～ん、全然わからないや。

「でも一夏と仲直りしたいんだよね。」
そういうと鳳さんは首を縦に振った。どうしたらいいんだろう・・・。
「それならこうはどうかな。今度のクラス対抗戦(リーグマッチ)で僕が勝ったら一夏に説明して謝ってもらって、鳳さんが勝ったら一夏に説明しないで謝ってもらうっていうのはどう？」
なんとまぁ、一夏だけ徳をしない賭けだね。まぁ、鳳さんの機嫌を直すためだからね。
「悪くはないけど、絶対アタシが勝つからね。」
「言いましたね。マスターの実力を甘く見ないで下さいね。」
あっちはあっちで話が盛り上がってるね。それにしても、鳳さんの機嫌が直ってよかった。さて、疲れた体を寝て癒そうっと。
「鳳さん、おやすみなさい。」
「おやすみ、光」
「おやすみなさい、マスター。」
僕は2人の声を聞きながら眠りについた。

同時刻、とある場所に人影が3つ（男性が1人、女性が2人）あった。
「本当にここであっているのか、スコール。」
「間違いないわM。ここに何かがいた形跡があったのよ。」
「その者を仲間に引き入れたいというのか？」
「全くをもって、その通りなの。」
どうやらここにいたと思われる何かを仲間にしたいらしい。
「この様子だと、この方角に進んでいったらしいわね。」
その中でもリーダー格らしい人物――スコールはそう呟いた。その姿を遠くから見られていたことを3人は気付いていなかった。

第十六話　光のルームメイト（後書き）

今回のゲストは山田先生だ。

真：ここでは真耶さんでいいですよ。

光：なんか織斑先生と同じノリだね・・・。

真：古代くん、どうしたの？

光：いえ、何でもありません。ところで真耶さんはＧＭというＭＳを知っていますか？

真：たしか『ファースト・ガンダム』の量産機ですよね。

光：真耶さんはＧＭが可愛いと思ったことありますか？

真：そんな風にＧＭを見てはいないと思うけど、どうして？

光：実はうちの作者が『ＧＭ可愛い～～！』って言ってたのを見たんですよ。

少し訂正させてくれ。可愛いのはＧＭじゃなくて、アッガイだ。

光：とまあこんな感じです。

真：は、はぁ。そうですか。

ＧＭも可愛いけど、やっぱアッガイサイコーでしょ。とりあえず次回もお楽しみ

に。

光：最後ぐだぐだになったね。

真：え～っと。か、感想よろしくお願いします。

第十七話　クラス対抗戦まであと・・・（前書き）

ネクサスのＯＰって格好良いよね。

光：たしかに。

Ｇ：私は『英雄』が好きです。

？：我は『青い果実』だな。

サ：そんなことどーでもいいだろ。

フ：早く進めてくれ。

わかったよ。それではスタート！

第十七話　クラス対抗戦まであと・・・

5月になった。
あの時の賭けのせいか、一夏と鳳さんの仲はなかなか良くならない。むしろ悪くなってるような気がする。これが僕のせいだったら謝りたいな。
僕は今、放課後の第3アリーナで特訓をいつものメンバーでしている。かすかに空が橙色に染まりはじめているのがとてもきれいだ。これが最後の訓練だと思うと寂しくなってくる。
「それにしても、光の実力は日に日に上がっていくな。」
「まあ、4人で特訓しているからな。」
「だけどこれほど僕の実力が上がったのは皆のお陰だよ。」
「当然ですわ。なにせこの私が訓練に付き合っているんですもの。」
3人とも自分がしたいこととかあるはずだけど、僕の特訓に付き合ってくれてとても嬉しく感じてるよ。一夏や箒に教えてもらった剣術や、セシリアに教えてもらった中距離射撃型戦闘法は絶対役に立つと僕は信じてるからね。
皆で談笑していると、ピットのドアが開く音が聞こえた。開く音がダイブハンガーのドアの音と似ているからちょっと懐かしいなあ。
「あれ？もう来てたの？」
ドアの向こうにいたのは、なんと鳳さんだった。さっきも言ったけど、一夏との仲はまだ悪いんだ。どういう心境の変化だろう。・・・やっぱり箒は顔をしかめてるね。
「鳳さん、どうやってここに「ここは関係者以外立ち入り禁止のはずだぞ！」・・・最後まで言わせてよ。」
でも本当にどうやってここに来たんだろう。
「あたしは関係者よ。一夏と光の関係者。だから問題なしね。」
一夏のことならわかるけど、なんで僕も？ただ一緒の部屋なだけ・

・・・。なんでセシリアも顔をしかめてるの？
「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな・・・。」
「盗っ人猛々しいとはまさにこのことですわね！」
やだ、怖い。この空間内にいるとダメージが蓄積されていくみたいだ。まるでギジェラの花粉で充満した部屋にいるみたいだ。
どうやら一夏もそんなことを考えていたらしく、箒に怒られていた。あっ、鳳さんが間に入って止めた。一夏と話をしようとしているところを見ると、どうやら一夏に謝ってもらいたいみたい。でもそうしたら賭けの意味がないよ。止めなきゃ。
「鳳ｓ「謝りなさいよ！」！！鳳さん？」
なんか口喧嘩に発展してるし。今は違う意味で止めないと！
「ちょっと２ｒ「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！」
「あっきれた。まだそんな寝言言ってんの？約束の意味が違うのよ、意味が！」・・・。」
・・・なんで２人とも、相手のことをわかってあげられないの？
「あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね！？」
「だから、説明しｔ「ドカァァン！」って・・・光？」

なんだというのだこの殺気は！？一夏と鳳鈴音があまりの禍々しさに一瞬固まってしまうほどじゃないか。私も脚の震えがさっきから止まらないぞ。
「一夏・・・鳳さん・・・。たしかにどっちの言い分もわかるけど・・・、もっと相手の考えをわかってあげてよ・・・。」
言っていることは正しいのだが、今の光を見ているとそんなことを考えられない。
「箒さん。私この空気に耐えられませんわ。」
セシリアが小声でそう言ってきたが、私だって耐えられない。光は部分展開して『ガンダム』の右腕を装着しその腕でアリーナの壁を叩いたのだが、叩いたところを中心に小さなクレーターができて

いた。ＩＳを装着しても、腕力はそれほど強くならない。とすると、光自身の腕力はどれ程のものなのか。・・・謎だ。
「わ、わかったから、ＩＳを解除してくれ。」
「そ、そうよ。話し合うにしても、ＩＳを装着してるんじゃ話もできないじゃない。」
「・・・じゃあ２人とも。・・・ちゃんと話し合うことを約束して。」
２人は光が言い終わると、すぐ首を縦に振った。私もあのオーラには逆らえないな。
「・・・じゃあちゃんとお互いのことをわかってあげてね。」
・・・私が最も怖いと思う人がもう１人増えた気がする。

この出来事のあと、一夏、箒、セシリア、鈴の４人は光を怒らせてはいけないと心に誓ったのであった。

第十七話　クラス対抗戦まであと・・・（後書き）

今回のゲストは、セシリア・オルコットです。

光：やっとセシリアまできたね。

セ：今回はたくさんお話しましょう。

光：じゃあセシリア。セシリアのＩＳ『ブルー・ティアーズ』ってＢＴ兵器だよ

ね。なんか『ストライクフリーダム』のスーパードラグーンと同じみたいだった

けど・・・。

セ：そうですわね。これほど似るとは・・・。

情報によると、ＢＴ兵器よりドラグーンの方が出力が上で、さらにドラグーンの

方が扱いやすいみたいだよ。

セ：ＢＴ兵器は４基扱うだけでも苦労しますのに。

光：なんかごめんね。

今日はここまで。次はいよいよクラス対抗戦だね。

光&セ：感想待ってます（わ）。

第十八話　クラス対抗戦当日（前書き）

光：とうとうこの時が来たね。

頑張ってね。

G：応援しています。

ノ：次元の狭間で応援してるぞ。

それでは十八話スタートゥ！！

第十八話　クラス対抗戦当日

試合当日、第2アリーナ第1試合。組み合わせは僕と鳳さん。
あのときの賭けはまだ継続されていて、鳳さんはやる気満々だ。
さらに噂の新入生同士の戦いとあって、客席は満席。通路まで立ち見の生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するみたい。まるでクルス・マヤのライブ級だ。
「マスター、鳳さんが待ってますよ。」
鳳さんのＩＳは『甲龍（シェンロン）』で、ブルー・ティアーズ同様の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴だね。肩の横の棘付き装甲（スパイク・アーマー）が格好良い。良いな。
「スパイク・アーマーは格好良いですが、似合うのはザクシリーズかガシリーズだけですよ。」
ガシリーズ？ザクシリーズならわかるけど・・・。ガデッサのことか。
『それでは両者、規定の位置まで移動してください。』
アナウンスに促されて、僕と鳳さんは空中で向かい合う。
「光、絶対私が勝つからね。」
「僕だって負けるわけにはいかないよ。」
僕はオープンチャンネルで鳳さんと話してるんだ。オープンチャンネルはプライベートチャンネルより使いやすいけどね。
『それでは両者、試合を開始してください。』
ビーッと鳴り響くブザーで、どちらも同じ瞬間に動く。
僕のユニットは『ダブルオーライザー』だけど、機動力には慣れた。脅威の機動性で鳳さんを撹乱する。
「ちょこまかちょこまかと！」
鳳さんがイライラし始めた。計画通りだね。今回の作戦は、相手の集中力を削いで隙を作らせる戦法をとろうと思ったんだ。
「このっ、当たれっ！」

すると鳳さんは肩アーマーをスライドさせて、何かを打ち出してきた。既の所で避けたけど何だったんだ？
「今のはジャブなんだからね。」
本来なら余裕なときにいう台詞だけど、さっきの衝撃を軽く避けられて驚いてるから様になってない。
ズバァァン！
さっきより強い衝撃がきたから、ＧＮソード？で切ってみたけど、ＧＮソード？がダメになっちゃった。

なんと！ここで少年のガンダムに出会えるとは！乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない！
「グラハム、それでは文法的に間違っているぞ。」
何？そうなのか千冬。どうやら間違った使い方をしていたらしい。なんたる不覚！
「しかし、なんなんだあれは？見たこともないぞ。」
古代少年には見えているらしいが、私たちには砲弾どころか砲身も見えないとは。さすが少年と同じ目を持つ漢だな。
「あれは『衝撃砲』と言って、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して打ち出す第三世代型兵器だ。」
さらに説明してもらったが、この『衝撃砲』は死角がないらしい。古代少年、この『衝撃砲』にどう立ち向かう？

「なんで当たらないのよ！衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに。」
うーん？直感で避けてるつもりなんだけどね。だけどこのままじゃ勝てない。一気に突っ込んで、短期でけりをつけようと僕が鳳さんに接近しようとした瞬間、何者かがアリーナの壁を突き破って乱

入してきた。
「はっ。待ちに待った戦争だぜ。」
『『『我等は復讐する！我等を悪魔といった貴様たちに！』』』
片方は細身で真紅のボディに、大きなバインダーが2つ腰に装填されていて、武器は自分の腕以上の大きさの剣を持っていた。もう片方はゴツゴツしていて、まるでゴーレムみたいなフォルムだ。よく見ると、両肩にミサイルを積んでいる。どちらも認識がなかったが、片方には面識がある。僕の世界で神になろうとした炎魔人・・・。

（ここからはプライベートチャンネルでの会話です。）
『キ、キリエル！』
『なぜ私たちの名を！』
『そうか。貴様、ティガだな！』
『ハハハハハッ。ここであんたに会えるとはね。』
なんでここにキリエルが！異世界に帰った訳じゃなかったのか！
『あのとき、私たちは帰る途中何者かに襲撃された。』
『そのせいで、我等キリエルは全滅。残ったのは私たち3人だけだ。』
『そのとき、声がしたのよ。『お前たちをそうさせたのは、人間たちだ。』ってね。』
『そんな・・・。』
まさかそんなことがあったなんて・・・。
「お前ら！いつまで話してんだよ。俺は戦いたくてたまんねぇんだよ。」
『わかった。なら・・・。』
『私たちと・・・。』
『正々堂々・・・。』
『『『勝負しろ！』』』
このことにより、アリーナは緊急事態に陥った。

第十八話　クラス対抗戦当日（後書き）

光のＩＳ『Ｇ４』についてどれだけ知ってるかクイズを出すよ第２弾！！

サ：今度は俺たちか。

フ：できるだけ頑張ってみよう。

？：我も良いか？

光：どうぞどうぞ。

それでは問題。光が初めてＩＳを起動したとき、初めてなったユニットは？

サ：あっ？ガンダムだろ？

正解。次行くよ。その時使った武装の種類と数は？

フ：ビームライフル×１、ビームサーベル×２だな。

正解。最後。『Ｇ４』の本来の姿は？

？：たしか・・・、ファーストだろうか。

お見事。全問正解です！おめでとうございます。

サ：なんかもらえるのか？

商品はＰＤＩです。

フ：これはなかなか良いな。

今日はここまで。次回もお楽しみに。

？：感想、待っている。

第十九話　システム起動！その名はＴＲＡＮＳ－ＡＭ！！（前書き）

光：ねえ作者。いったい何してるの？

（ケンプファーのコスプレをしながら）一回こういう格好をしたかったんだ。

Ｇ：悪趣味ですね。

なんとでも言って下さい。それよりも十九話スタート。

一：なんか格好良いなそれ。（ケンプファーを見ながら）

箒＆千＆グ：大丈夫か・・・・。

第十九話　システム起動！その名はＴＲＡＮＳ－ＡＭ！！

『光、試合は中止よ。すぐにピットに戻るわよ。』
たしかに正論かもしれないけど、相手がそれを許さないだろう。
『はっ。させるかよ。』
真紅のＩＳはあの大剣をなんとライフルに変えて撃ってきた。あれじゃあ鳳さんに直撃する！
「鳳さん、危ない！」
僕はビームの雨の中を掻い潜り、鳳さんに近づくと抱きかかえて一気に離脱する。
「鳳さん、大丈夫？」
「あ／／／ありがとう。・・・出来ればおろしてくれると嬉しいんだけど／／／。」
「あっ、ごめん。」
いつまでもこんな格好してると恥ずかしいよね。
『古代くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧にいきます！』
ダメだ。キリエルはそんなことじゃ倒せないし、あの紅いＩＳの強さがわからない。
『マスター、ノアさんから情報です！あの２機は私たちが倒さねばならない相手のようです！』
そうだったんだ。それなら他の人たちを巻き込む訳にはいかない。
「織斑先生、ここは僕に任せてください！ここは僕が食い止めます！」
『でも古代くん！『任せたぞ。』でも織斑先生！・・・わかりました。古代くん。必ず帰って来てくださいね。』
「ありがとうございます。必ず戻りますから待っていてください。」
絶対負けるわけにはいかない！

「鳳さんも逃げて。ここは僕が食い止めるから。」
「何みずくさいこと言ってんのよ。私も頑張るわ。」
「鳳さん・・・。わかった。なら僕はあの黄色いＩＳを、鳳さんは紅いＩＳをお願い。」
「・・・わかったわ。絶対一緒に戻ろうね。」
そうだね。ここで死んだら元も子もないからね。そう思いながら僕は首を縦に振った。
「僕はここにいる皆を、君を絶対守るから。」
「えっ／／／あっ、うん／／／」
キリエル！お前たちの野望、僕が食い止めて見せる！

奴等が古代の言っていた『世界の歪み』か。古代はこれからそのような敵と戦っていくのか。私にも力があれば古代の手伝ってやりたいものだ。・・・古代、死ぬなよ。

あっちの紅いＩＳはかなりの手慣れで、鳳さんでもってしても不利だった。あの大剣を普通に振るっているけど、どこにそんな力が・・・。
『戦いの最中に他人の心配をするとは、どこまで愚かなのだ！』
そう言うと、その大きな腕でパンチを繰り出してくる。このＩＳはパワータイプのＩＳらしい。ならスピードは遅いはずだ。ならスピードで翻弄しながら攻撃していこう。
『ちぃ。ちょこまかちょこまかと！』
『ダブルオーライザー』の機動性をなめるな！
『ここはロイダーで攻めるぞ！』
『その方が無難だな。』
ん？ロイダー？どういうことだ？
『『『オープンゲット！』』』
そう言うと、キリエルたちのＩＳは３機の戦闘機になった。だからキリエル人が３人いたんだ。

『『『ゲッターチェンジ！チェーンジゲッターロイダー！』』』
すると3機の戦闘機が1つのＩＳになった。どうやらキリエルのＩＳはタイプチェンジができるらしい。
『特と見よ！このゲッターロイダーのスピードを！』
なんだって！ダブルオーライザーのスピードと同じじゃないか！
さらに右腕のドリルが厄介だからどうしたら良いか・・・。
「キャァァ！」
なっ、鳳さん！しまった、キリエルに夢中で鳳さんを守ることを忘れてた！
『これで・・・。』
や、止めろーーー！
――――ＴＲＡＮＳ―ＡＭ――――
突如画面にこのような文字が現れ、機体が赤く輝き始めた。
『マスター、これはトランザムシステムで一時的に機体性能が3倍に上がります。』
これなら、鳳さんを守れる。待ってて！

一応名乗っとくが、俺様はアリー・アル・サーシェスだ。今ＩＳ学園を襲撃してるんだが、俺様の機体のアルケーガンダムはインフィニットなんたらになっちまったらしい。まぁ、戦えるなら良いんだけどな。おっと話が逸れたな。俺が戦っている相手は、なんかガラッゾによく似たインフィニットなんたらなんだけどよ。そいつが弱いのなんのって。剣の振り方や衝撃砲の打ち方がなってねぇ。これならまだクルジスのガキのほうがよかったぜ。面倒くせぇからファングで一気に沈めてやるよ。
「これで・・・。」
『や、止めろーーー！』
な、なんだこの感覚。まさかあのゲッターなんたらと戦ってたあいつなのか！

そいつはクルジスのガキが乗ってたガンダムに似たインフィニットなんたらに乗ってて、まさかと思ったら、トランザムしやがった。ガンダムもどきはガラッゾもどきを庇うようにして俺の前に出てきやがった。上等だ！やってｙ『ｐｉｐｉｐｉ！ｐｉｐｉｐｉ！』ッたくなんだよ。

『サーシェス、戻ってこい。今回はここまでで良い。』

「おいフロンタル！せっかく良い所なのによぉ。」

『・・・オータムが待ってるぞ。』

「！・・・わかった。戻りゃ良いんだろ。戻りゃ。」

仕方ねえな。退却してやるよ。

「あばよ。ガンダムもどき！」

あっ？ゲッターなんたらはどうしたって？知るかそんなの。

良かった。鳳さんは守れた。後はゲッターロイダーだけだ！

『今度はドラゴンでいくぞ！』

『一気に決めてやる！』

『『『オープンゲット！』』』

『『『ゲッターチェンジ！チェーンジゲッタードラゴン！』』』

今度は僕でいうマルチタイプかな。だけどここで逃がす訳にはいかない！

『『『ゲッター！ビィーム！！』』』

皆をやらせるかーー！

「トランザム！ライザー！」

ピンク色のビームとＧＮソード？がぶつかり、スパークが全体を照らし煙が広がる。その煙が晴れたとき、そこにあったのは・・・。ゲッター炉心を破壊され、沈黙している『ゲッタードラゴン』と、気絶している鈴を抱える『ダブルオーライザー』だった。

第十九話　システム起動！その名はＴＲＡＮＳ－ＡＭ！！（後書き）

トランザムキター！！

グ：懐かしいな。

光：今回のゲストはエーカー先生か。

その通り。なかなか察しが良いね。

光：それはどうも。それよりエーカー先生。

グ：グラハムさんで良い。

光：ではグラハムさん。アメリカ空軍に所属していた時はどう思いましたか？

グ：そうだな。一番真っ先に『フラッグが無い！』と、考えてしまった事だな。

光：やはりグラハムさんにはフラッグが似合ってますからね。

グ：慣れとは怖いものだ。

僕もフラッグが好きだよ。あの立ち姿、プラズマブレード・・・かーーーっ！！

光：また暴走したよ、作者。まあそれは置いといて、次回もお楽しみに。

グ：感想を待っているぞ、フラッグファイター諸君！！

あっ、そうだ。次回から光の部屋をお休みします。また再開するので、待ってい

てください。

第二十話　その後（前書き）

光：なんとか撃退したね。

Ｇ：強かったですね。特にあの紅いＩＳが。

サ：伊達に傭兵してるわけじゃねえんだよ。

まあそれは置いといて、第二十話どうぞ。

第二十話　その後

あれからあたしは気絶していたみたい。あの紅いＩＳに蹴りを入れられるところまでは覚えてたけど、気がついたら保健室のベッドで寝ていた。隣にはあのＩＳたちと一緒に戦ってくれた光がいる。たぶんあたしを看病していて、疲れて寝ちゃったんだと思う。今なら光と・・・、ってなに考えてるのよあたしは！あたしが好きなのは一夏で光は違うって思いたいけど、本当は光のことが好きなんだと思う。あのときはあたしを守るって言ってくれたり、あ／／／頭を撫でてもらったり。って違う違う。

どちらにせよ、あたしは光に恋してる。今隣にいる光と・・・、き、ききキスを。

「ん？あれ、鳳さん？気がついた？」

な！なんでこのタイミングで起きるのよ！もう少し寝てたら、ききキスが・・・。

「大丈夫？まだ寝てても良いんだよ。」

「へ、へいきよ。これくらいどうってことないわ。」

光ったら、人の心配より自分の心配をしなさいよ。

「マスターには私がいます。ですからご心配なく。」

そういえば、光のＩＳ『Ｇ４』って喋れるのよね。初めは驚いたけど今はへいき。

「・・・マスターは誰にも渡しません。」

「な、なんですって！どういうことよ。」

「マスターを影で支えていくのは、私です。あなたではありません。」

キーッ！悔しい。たしかに正論だけど納得できない。

「２人ともどうしたの？何かあった？」

どうやら鳳さんは全身打撲で済んだみたい。良かったぁ、全員守れて。
「鳳さん。「鈴でいいわ。何か他所他所しいから鳳さんはやめて。」じゃあ鈴。さっき鈴の顔がとても近かったけど、なんで？」
そう聞くと、何故か鈴の顔が赤くなった。なんか恥ずかしいことでもあったのかな？
それにしてもあの紅いＩＳに変幻自在のキリエルのＩＳ・・・。僕の敵はあんなにも強いのか？だとしたら僕だけじゃ勝てなくなるかも・・・。
「ねえ、光。」
「ん？どうしたの？」
鈴が話してきたけど、何か重要な話かな。
「あたし、料理を作れるんだ。も、もしあたしの作る料理が今より上手になったら、毎日食べてくれる？」
へぇ、鈴って料理が作れるんだ。もし食べれるんだったら、食べてみたいな。
「いいよ。毎日は無理かもしれないけどね。」
「本当に！絶対に約束だからね！」
なんか鈴のテンションが高くなってる。でも元気になって良かった。

学園の地下５０ｍ。そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。
「しかしなんだったんだ、あのＩＳは。３つに分離して戦闘形態を変えるなど、無人機でなければ扱えない。それをまるで３人で操っているかのようだ。」
沈黙したＩＳが解析されている間、グラハムと千冬はアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ていた。グラハムはそう呟き、千冬は何か考え事をしているようだった。

「織斑先生、エーカー先生。あの機体の解析結果が出ました。」
ドアが開き、ブック型端末を持った真耶がいつもよりきびきびとした動作で入室してきた。
「どうだった？やはり、無人機のＩＳだったか？」
グラハムはそう聞いたが、帰ってきた言葉は信じられないものだった。
「いいえ。これはＩＳではありませんでした。」
「「なんだと！」」
「この機体名は『ゲッターＧ』といい、どのような方法で動いていたかは不明です。古代くんとの戦闘により損傷が激しく、おそらく修復は無理かと。」
この世界でＩＳは絶対の強者。それと同じ、それ以上の力を持った機体はこの世界でどこにも存在しない。それが現れたということはどんな意味を表すのか・・・。

・・・まさか『ゲッターＧ』を倒すとは。もしかしたらこれからも強くなるかもな。・・・だったら尚更あいつを生かしておくわけには・・・。
『それだけは了承できないなダーク。彼にはあの企業を倒すために働いてもらわねば。』
そうだったな。すまない『ｅｘ＋』。まあこれからも楽しみにしているぞ。
・・・・・『俺』・・・・・。
シールドバリアーの壊れたアリーナの上に、喋る何かの部品を持った紫のＩＳが立っていて、不気味に学園寮を見下ろしていた。

ここはとある荒野。何もないはずの場所でまるで穴が開くように空間が歪み、１機の機体が飛び出した。

「ここは何処だ？なっ！ザ・ワンが俺と同じくらいの大きさに！」
声からして１６才ぐらいだろう。どうやら彼の機体は『ザ・ワン』
というらしい。
「もしかして、この世界を救うようなことをしたら帰れんのか？」
しかし彼は気付いていなかった。この世界にはすでにその役割を
もった存在がいたことを。

第二十話　その後（後書き）

ここでは敵ＩＳの能力値を測る場となります。

サ：今回は俺のＩＳ『アルケー』を測定するぜ。

サーシェス専用ＩＳ『アルケー』

『機動戦士ガンダムＯＯ』のアルケーガンダムがＩＳの世界に跳んだ際、ＩＳになった機体。見た目はアルケーそっくりだが、コアファイター機能が除去されている。射撃能力、格闘能力、機動力が全能力において長けている。動力源はオリジナルＧＮドライブ（なぜこうなったのかは不明）。武装はＧＮバスターソード・ＧＮビームサーベル・ＧＮファング・ＧＮシールドと、全く変わっていない。本話では鳳鈴音のＩＳ『甲龍』と初めての戦闘をし、相手を圧倒するほどの活躍を見せた。

サ：さすがはガンダムだな。

ですねぇ。次の紹介は『ゲッターＧ』です。

サ：作者に変わって、感想待ってるぜ。

第二十一話　ボーイ・ミーツ・ボーイ（前書き）

今日ＩＳの小説第七巻を買ってきました！！

サ：やっとかよ。

光：まあ、作者にも予定があったんですから。

Ｇ：頑張ってください。

フ：私も出たいものだな。

それでは二十一話スタート。

第二十一話　ボーイ・ミーツ・ボーイ

「ねえ、聞いた？」
「聞いた聞いた。」
「え、何の話？」
「だから、あの織斑君と古代君の話よ。」
「いい話？悪い話？」
「最上級にいい話。」
「聞く！」
「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ。女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで――」
早朝、思春期女子で埋め尽くされた食堂はかしましい。その食堂のなかに大きな箱を抱えた光がいた。
『これが女の子のテンションか・・・。』
『たしかに・・・、この雰囲気の中で朝食は食べれませんね。』
この少年――古代光――は、元はウルトラマンティガであり、視力・聴力共に常人より良いため、普通よりかしましく聞こえる。・・・無論、女子の内緒話も聞こえるわけで・・・。
『何だろうね。僕と一夏の話で最上級にいい話って。』
『気になります。私にとっても最上級にいい話だったら尚更です。』
もう一度言うが、光は元ウルトラマンティガで、人に興味を持っている。友達が1人増えていくことに喜びを感じるほどで、人が興味を持つものにも興味を持ってしまうのだ。
『聞いてみたいな。でもずけずけと聞けないし・・・。』
『そうですよね。私が喋ることが出来れば良いのですが。』
実に物好きである。まあ、それが光の良い所なのだが・・・。
『・・・そろそろ行くか。』

『そうですね。』
こうして1人と1つは食堂をあとにした。ちなみに光の朝食は納豆定食ご飯大盛りだ。どうやら光は納豆が気に入ったようである。

「やっぱりハズキ社製のがいいなぁ。」
「え？そう？ハズキのってデザインだけって感じしない？」
「そのデザインがいいの！」
「へぇ。会社によってデザインが違うんだ。」
月曜日のＳＨＲ前。クラス中の女子と賑やかに談笑をしていた。みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見を交換している。うん。やっぱり多くの種類があるね。
「そういえば織斑君と古代君のＩＳスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど。」
「それは言えるな。俺のはイングリッド社のストレートアームモデルが元の特注品って聞いてるが、光のはどこ製だ？」
「え？いや・・・。どこ製って言われても・・・。」
まさか神様が作ってくれました～～なんて誰も信じてくれないだろうね。でも、自分が作りました～～って言ってもなぁ。
「古代くんのＩＳスーツは試作品で、宇宙での活動を目的とした次世代型なんです。オプションでメットと小型酸素ボンベを付けると、最長２４時間宇宙空間で活動できるようですよ。」
すらすらと説明しながら現れたのは、山田先生だった。山田先生、この状況を打破してくれてありがとうございます。
「へぇ、古代くんのスーツって凄いんだね。」
「マジかよ。宇宙服は、色んな機器が付いたスーツだと思ってたぜ。」
まあ、それがＧＵＴＳスーツクオリティだからね。
「諸君、おはよう。」
「お、おはようございます！」

やっぱり織斑先生からイルマ隊長と同じオーラが出てるように感じる。逆らっちゃいけないっていう感覚だよ。

「今日から本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう。」

いや構うでしょ、そこは！やっと女子のＩＳスーツを来た姿を見てもあまり恥ずかしくならなくなったけど、学校指定の水着や下着は・・・。

「ヒカル、ノウハフアンテイ。ヒカル、ノウハフアンテイ。」

『マスター、ハロが脳波指数の歪みを検知しました。どうしました？』

え？ちょっと待って。なんでハロがここにいるの？たしかあのとき置いていったはずなのに。

「古代、何だそれは。」

「あっ、これ可愛いですね。名前は何て言うんですか？」

「これも光が作ったのか？」

「それとその箱の中身何～～？」

ハロの出現により、クラスがかしましくなる。こうなることを予測したからハロを置いていったのに。

「そういえば古代。」

「織斑先生、何かようですか？」

「エーカー先生から伝言だ。『例の物は、出来ているか。』だそうだ。」

ああ、あれですね。出来ていますよ。待っていてください。

「はぁ、まったくこれだから。古代を見習え。山田先生、ホームルームを。」

「え？は、はいっ！」

ハロ騒動で忘れてたけど、今はＳＨＲの時間だった。最近、物忘

れが激しいかも。
「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」
え？
「「えええええっ！？」」
この時期に転校生？４月の入学に間に合わなかったのかな？いきなりの転校生紹介にクラス中がざわつく。
（でも、なんで僕たちのクラスに？普通は分散させるはずなのに。もしかして誰かが情報操作したのかな。・・・まさかね。）
そんなことを考えていると、教室のドアが開いた。
「失礼します。」
「・・・・・。」
クラスに入ってきた2人の転校生を見て、ざわめきが止まる。
たしかにそうだね。だって・・・・・。
そのうちの1人が、――――男子だったんだから。

第二十一話　ボーイ・ミーツ・ボーイ（後書き）

今回は『ゲッターG』の機体を説明したいと思います。

疑似ＩＳ　『ゲッターG』

？？？が作り上げた『本来この世界に存在しない』機体。ドラゴン号・ロイダー号・ポセイドン号の三機のゲットマシンからなり、ゲッタードラゴン・ゲッターロイダー・ゲッターポセイドンの３タイプにチェンジする。

陸戦特化型　ゲッタードラゴン

武装が豊富な手数で相手を圧倒する戦い方をする。本小説では最強技である『ゲッタービーム』を放つが、『ダブルオーライザー』の『トランザムライザー』に敗ける。

空戦特化型　ゲッターロイダー

全タイプ内で最も速く、その機動性で相手を攪乱戦法を得意とする。その機動性は『ダブルオーライザー』と同等。本小説ではそんなに活躍していない。

海戦特化型　ゲッターポセイドン

両肩のミサイルが特徴のパワータイプのゲッター。本作品では描写がないが、ミサイルでアリーナの壁を破壊した。本来の力を最も発揮できる所は海中である。

次回もお楽しみに。感想待ってます。

・・・やっぱりチートだわ、この機体。やんなきゃよかった。

キリエル三人衆：それはな～～～い！！

第二十二話　2人の転校生（前書き）

だんだん寒くなってきたね。

光：こっちだとまだ夏になるかならないかの時期だけどね。

G：機械なので感覚はわかりませんが、冬はきつそうですね。

それでも寒さに負けないで更新するよ。それでは二十二話スタート。

第二十二話　2人の転校生

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

転校生の1人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

へぇ、ISを使える男性って3人もいたんだ。

「お、男・・・。」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々いると聞いて本国より転入を――――。」

でも、男の子にしては綺麗な顔立ちだな。女の子だったら間違いなく美人の部類に入るね。

「きゃ・・・。」

「はい？」

き、来た・・・。

「きゃあああああああ――――っ！」

一夏命名、ソニックウェーブが発動。その衝撃は僕たちにも直撃し、体力を徐々に奪っていく。エボリュウの電撃みたいだ。

「男子！3人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！古代くんと違って守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった～～～～！」

女子のテンションって、何なんだろう。しかも最後のって・・・。

たしかに僕は地球生まれじゃないけど。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」

先生。めんどくさがらないで止めてくださいよ。もう耐えられません。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから。」

なんだろう。今日は山田先生が天使に見える。

？何だろうこの異様なプレッシャーは。その源はもう1人の転校生だった。こんな子が・・・。
輝く銀髪。その髪を腰近くまで長く下ろしている。そして左目に眼帯。軍隊が使うものと似ている、もしくは同じかもしれない。
それにしてもこのプレッシャー。これほどのプレッシャーを出せるなんて。何があったのかはわからないからどうしようもない。
「・・・・・・・。」
当の本人は織斑先生を見ていて、まだ自己紹介をしていない。山田先生はおろおろしている。
「・・・挨拶をしろ、ラウラ。」
「はい、教官。」
いきなり姿勢をただして素直に返事をしたけど、織斑先生に忠実なのかな。
「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ。」
「了解しました。」
体の真横にピッと伸ばした手、かかとで合わせた足、地面に垂直の背筋。やっぱり軍人だね。なんで軍人がここに転入してくるのか不思議だけど、何か事情があるのかもしれない。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」
「・・・・・・・。」
クラスメイト全員が沈黙。みんな続く言葉を待っているけど、多分これで終わりだろうね。
「あ、あの、以上・・・ですか？」
「以上だ。」
やっぱり、必要最低限の挨拶しかしなっかよ。
「！貴様が――――。」
一夏が危険だ！直感でそう感じた僕は、ハロを掴んでボーデヴィッヒさんのところに投げた。
「ハロ、ごめん。」

「アーーレーー。」
ハロは、ちょうどボーデヴィッヒさんが一夏を叩こうとした手に当たった。ハロって結構固いから痛いだろうな。
「ヒドイ。ヒドイ。」
ハロ、本当にごめん。あとで調節してあげるから。
「っく！私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか。」
それにしても、なんで叩こうと思ったんだろう。
「あー・・・・・ゴホンゴホン！ではＨＲを終える。各人はすぐに着替えて第２グラウンドに集合。今日は２組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」
早くここから出ないと・・・・。これから女子が着替えるから教室から出ないと。
『マスター、彼女は一体・・・・。』
『それはあとで。早く出ないと。』
「おい織斑、古代。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。」
そうだった。さっきのやり取りですっかり忘れてた。
「君が織斑君で、君が古代君だね。初めまして。僕は――――。」
「それはまたあとで。早く更衣室にいかなきゃ。」
「そうだな。そうだ光、さっきはありがとな。おかげで叩かれずにすんだぜ。」
「どういたしまして。さあ、更衣室に行こう。」
そう言って、僕は一夏とデュノアさんの手を引いてそのまま教室を出た。
「僕たちは男子だからアリーナの更衣室で着替えだよ。これから実習のたびに移動するから、慣れてね。」
「う、うん・・・・。」
いやぁ、アリーナの更衣室が、ダイブハンガーの更衣室とはまた違って広いんだ。あれ？デュノアさんの様子がおかしいな。もしか

して・・・。
「デュノアさん、トイレとか我慢してる？」
「トイ・・・って違うよ！」
「ならいいけどね。行きたくなったら言ってね。」
そうなのだ。このままだと織斑先生の制裁が下るんだ。だって・・・・。
「ああっ！転校生発見！」
「しかも織斑君や古代君と一緒！」
しまった。少し歩く速度が遅かった。ＨＲが終わったから、早速各学年各クラスから情報先取のために駆けだしてきたんだ。ここで捕まるわけには！
「いたっ！こっちよ！」
「者ども出会え出会えい！」
そんな！こうも展開が早いなんて！一体誰が・・・。はっ、まさかムナカタ副隊長！？
「織斑君の黒髪、古代君の茶髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね。」
「しかも瞳はエメラルド！」
「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」
いや今年以外もちゃんとしたプレゼントをしてあげて！僕みたいに二度とできなくなる前に。
「な、なに？何でみんな騒いでるの？」
「それは僕たちが男子だからだよ。」
「・・・・？」
ん？反応がおかしい。どうしたんだろう？
「いや、普通に珍しいだろ。だってＩＳを操縦できる男って、今のところ俺たちしかいないんだぜ？」
「あっ！――――ああ、うん。そうだね。」
・・・なんだろう。この違和感は。・・・う～ん。わからないや。

「しかしまあ助かったよ。」
「何が？」
「いや、やっぱ学園に男2人はつらいからな。なあ光。」
「そうだね。何かと気をつかったりと大変だからね。1人でも男子が増えると心強いからね。」
「そうなの？」
う～ん。やっぱり何か引っ掛かってる。何かはわからないけど。
「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。こっちは古代光だ。」
「よろしくね。僕のことは光でいいよ。」
「俺も一夏でいいぜ。」
「うん。よろしく一夏、光。僕のこともシャルルでいいよ。」
「「わかった。」」
おお、一夏とハモったよ。なんていうタイミング。って言ってる場合じゃない！囲まれた！
「仕方ない。シャルル、これ持ってて。」
「え？いいけど。」
シャルルに箱を渡してと。それじゃ、行きますか！
「2人共、しっかり捕まってて。」
僕は2人を抱えて、窓の縁に足をかけて・・・。
「って光！ここ3階だよ！」
跳んだ。2人を抱えながら。
「ひゃあああっ！」
大丈夫だよ。ちゃんと木を伝っていくから。

第二十二話　2人の転校生（後書き）

突然ですが、出してもらいたいキャラ・機体を募集したいと思います。

光：急だね。

G：何ですか？

僕の知識じゃどんなキャラクター、どんなロボットがいるのかわからないからだ

よ。それに僕のモットーは『なるべく読者の意見を取り入れること』だからね。

サ：しっかし、ちゃんと送ってきてくれるのか？

フ：そこは読者の皆様に委ねよう。

期限は今のところ指定しませんので、どしどし送ってきてください。

第二十三話　登場！！『須左之男』！！（前書き）

【『須左之男』の詳細が明らかになりました。】

グ：やっとこの時が来た！！

今回は『須左之男』が出てくる話です。

一：どんな機体なんだ？

箒：気になるな。

光：それは話の中で出てくるから。

それでは二十三話スタート。

第二十三話　登場！！『須左之男』！！

さてとアリーナの更衣室に着いたよ。あれ？２人共ぐったりしてる。なんでだろう？

「マスター、自分の身体能力を忘れたのですか？」

そう言えば、ってまた人前で喋ってるし！

「あれ？今の声は誰？」

「マスターのＩＳの『Ｇ４』です。以後よろしくお願いします。」

「初めまして。シャルル・デュノアです。」

何か意気投合してるし！なんでだろう？

「初めは驚いたけどな。ってうわ！時間ヤバイな！すぐに着替えようぜ。」

「そうだね。織斑先生は時間厳守だからね。」

エーカー先生に渡す物もあるし。さてと、着替えますか。

「わあっ！？」

ん？本当にどうしたんだろう。上着を脱いだだけなのに。

「ってまだ着替えてないの？早くしないと。」

「う、うん。着替えるよ。でも、その、あっち向いてて・・・ね？」

「？？？まあ、別に見たくはないけどね。それじゃ、あっち向いてるよ。」

そんなことより早く着替えないと！あとはズボンを脱いでＧＵＴＳスーツを着るだけ。ここまでの所要時間、１分。

「２人とも支度できた？ってシャルル着替えるの早いね。」

「い、いや、別に・・・って一夏まだ着替えてないの？」

「ちょっと待ってくれ！もう少しだから。」

どうやらＩＳスーツを着るために裸にならないといけないようで、摩擦によって着ずらいらしい。僕のは試作品らしいので、下着を着ても問題なくダイレクトに動かせるらしい。

「よっ、と。――よし、行こうぜ。」
「う、うん。」
「早く行こうよ。時間がない。」
あと5分しかない。僕たちの執行猶予時間にならないといいけど。

「遅い！」
「「「すみませんでした！」」」
やっぱり遅刻でした。もう少しだったのに・・・・。
「いつも間に合うくせに・・・。」
ごめんセシリア。完全に僕が悪いです。
「どうしたのアンタ。また何かしでかしたでしょ。」
それは違うよ！と言いたいけど僕が言える立場じゃないね。
「それで古代少年。例の物は出来ているかな？」
「あ、はい。これです。」
3日3晩かけて作りました。どうぞ。
「こ・・・、これは・・・。」
「『須佐之男』です。エーカー先生の愛機をモチーフにしてみました。」
僕が作った機体は、まるで侍の兜のような形の待機形態になる物で、簡単に言うとＩＳじゃない。
「古代少年、感謝する。」
「良かった。喜んでもらえて。」
技術者として嬉しいです。
「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する。」
「はい！」
1組と2組の合同実習なので人数が倍以上。出てくる返事も妙に気合いが入っていた。
「織斑先生、少し良いですか？」
「どうしました？エーカー先生。」

エーカー先生、まさか・・・。
２人は少し話し合っていたけど、戻ってきた第一声が。
「急遽、エーカー先生が戦闘を実践することとなった。山田先生、出てきてください。」
キィィィン・・・。
この音。山田先生か・・・。
「あああああーっ！ど、どいてください～！」
仕方ない。いくよ、『Ｇ４』。
「ガンダァァム！」
ガンダムを展開させて、高速で接近。速度をあわせてから山田先生を抱えて、速度を落としながら地面に着いた。
「あああの／／／古代君？そそ／／／そろそろ下ろしてくれると嬉しいけど・・・。」
またやっちゃった。そろそろわかったと思ったんだけどな。
パキューン！
山田先生を下ろした途端、僕の顔があった所をレーザーが掠めた。これは・・・。
「ホホホホホ・・・。残念です。外してしまいましたわ・・・。」
・・・・・セシリア、絶対怒ってる。顔は笑ってるけど、青筋が見える・・・。
「・・・・・。」
ガシーンと何かが組み合わさる音―たぶん《双天牙月》を連結させた音―が聞こえた。確かあれって投擲できるんじゃ・・・・・。って本当に投げてきた！
「うわっ！」
条件反射でビームサーベルを取りだし《双天牙月》を叩き落としたけど、なんで！？
「ちっ。」
舌打ち！？僕って何か気に触ることでもした？
「自分の胸に聞いてみなさい！」

「だからアンタは鈍感なのよ！」
確かに、この前鈴に鈍感って言われたけど、この事とどんな関係なの！？
「オルコット、鳳、ちょうど良い。エーカー先生と戦ってみろ。」
「なっ・・・。まだ話が終わっていませんわ。」
「あいつに言いたいことがたくさんあるんです。」
・・・僕ってどうしてこうも問題を持ってきちゃうんだろう？
『マスターは女心をわかる努力をしているのですが・・・。』
なんでだろうね。あれっ？織斑先生が2人に何か話してる。何だろう？
「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね。」
「まあ、やれるだけやってみせるわ。」
すごい。たった1声で2人のやる気を出したよ。僕もこんな風になりたい。
「話は変わるが、この機体はどのように使えば。」
あっ、エーカー先生に使い方を教え忘れてた。
「先ずこの兜を頭に被ります。」
「こうか？」
「頭に被ると自動で固定されますので、あとは展開するだけです。」
これは時間をかけて考えたんだ。
「どうしたらよいのだ？」
「解除コードを入力すれば良いです。エーカー先生といったら・・・わかりますよね。」
「！そういうことか。わかった。」
エーカー先生は武士が今から決闘をするかのように立った。そして・・・。
「解除コード、入力！コードネーム、『そんな道理、私の無理でこじ開ける！』」

そう言うと、兜から緑色の粒子がでてエーカー先生を包む。そして爆発的に広がったあと、エーカー先生の体に装甲が展開された。それは全身装甲で、まるで鎧武者だ。・・・ちゃんと機能してるね。

「それが光さんの作ったＩＳ『須佐之男』ですか。」

「違うよ。これは『バイオロイド』といって、単一仕様能力は発現しないけど基本能力は高いよ。」

「アンタ、何てものを作ったのよ！」

「私が頼んだのだ。古代少年は機械いじりが趣味だと聞いたのでな。」

作ってるときは楽しかったな。全く飽きなかったし・・・、あっ。

「また作りたくなってきた！」

「「「「これ以上はダメ！」」」」

一夏に箒、セシリア、鈴からこう言われた。良いじゃん、作ったって。

「そろそろ始めようか。」

「え？あの、２対１で・・・。」

「いや、さすがにそれは・・・。」

「安心しろ。お前たちはエーカー先生にすぐ負ける。」

確かにそうだね。ノアさんから教えてもらったけど、エーカー先生は歴戦の戦士で当時最強のガンダムに幾度となく戦いを挑んで、戻ってきたらしい。

「手加減はしませんわ！」

「代表候補生の力、見せてあげる！」

「とくと見るが良い。古代少年が造りし我が『須佐之男』の力を！」

こうして、セシリア・オルコット＆ａｍｐ；鳳鈴音対グラハム・エーカーの実戦演習が開始された。

第二十三話　登場！！『須左之男』！！（後書き）

久しぶりに『光の部屋』が再開しま～～す。

鈴：今回はアタシがゲストよ。

光：なんか懐かしいな。

たった2回やってないだけだよ。

光：そうだっけ？

鈴：そんなことどうでもいいから早く話し合いましょうよ。

光：そうだね。じゃあ質問するけど、あの時襲撃してきた『アルケー』と戦った

感想は？

鈴：あのＩＳ、結構強かったわ。あの特殊兵器・・・、なんだっけ？

光：『ＧＮファング』。本体を突撃させて攻撃するほか、砲門を露出させてビー

ムを発射することもできるんだ。

鈴：そうそれ！あれに結構手こずったわ。

光：なんでかサーシェスは８基同時に展開できるんだよね。なんでだろ？

まあ、サーシェスクオリティだね。

・・・おっと、もうこんな時間。それでは次回もお楽しみに。

光＆鈴：感想待ってます（るわ）。

第二十四話　流石！グラハム先生！！（前書き）

グ：なんだこのタイトルは。

良い案が浮かばなかったから直感で書いてみた。

光：さすがにそれは・・・。

サ：なんか羨ましいぜ。

それでは二十四話スタート。

第二十四話　流石！グラハム先生！！

「くっ！当たりなさい！」
「何よあの速さ！ダブルオーライザーと変わらないじゃない！」
私グラハム・エーカーはセシリア・オルコットと鳳鈴音を相手に実戦演習を行っている。２人とも私の『須佐之男』を前に手こずっているようだ。それもそのはず、本来『須佐之男』は私の世界のスサノオを元に古代少年が造ったのだ。性能ではＩＳと同等、いやそれ以上か。どちらにせよ、相手として申し分ないはずだ。
『エーカー先生。この実戦演習は『須佐之男』のテストでもあるので、例の『あれ』をお願いします。』
『！・・・『あれ』か。わかった。』
そろそろ私も本気で相手させてもらおうか！

「すげぇグラハムさん。セシリアと鈴の動きについていってる。」
「むしろセシリアと鈴がグラハムさんのペースに乗らされているな。」
「それにしても、古代君が造った・・・バイオロイドでしたっけ？あの性能、ＩＳにも引けをとりません！」
「全く。古代の奴、いったい何をしでかしてくれたんだ。」
みんな思い思いのことをいってるね。・・・織斑先生、それは禁句です！とにかく、エーカー先生が例の『あれ』を使ってくれるようなので、本気を出すかな？『須佐之男』の性能がついていくといいけど・・・。
『・・・いくぞ！トランザム！』
よし、トランザムの発動実験は成功。あとは稼働時の記録を録れば良いから演習をみてみようっと。おぉ。セシリアと鈴ったら、さっきより格段と速くなった『須佐之男』に戸惑ってるね。まだまだ

いろんな機能が搭載されてるんだけどね。
『今の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ！』
エーカー先生、やっぱり燃えてる。良かった。先生は気に入ってくれたみたい。
『切り捨て・・・御免！』
あ、演習が終わった。勝ったのはやっぱりエーカー先生だ。最後は長剣の『舞零武』で、止めだった。エーカー先生には、剣が似合うね。
「エーカー先生、お強いですわ。」
「手も足もでなかったわね。」
「2人ともお疲れ様。怪我とかしてない？」
エーカー先生と『須佐之男』のコンビネーションは最高だから、2人が怪我してないか心配だったんだ。
「大丈夫ですわ。お心使い感謝しますの。」
「私も大丈夫。伊達に代表候補生してないわよ。」
良かった。安心したよ。
「古代少年、この『須佐之男』は私が受領した。心から感謝する。」
いやぁ、嬉しいですな。ハハハ・・・。
「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。」
わかりました。イル・・・織斑先生。
「古代、2度と同じ間違いをするなよ。」
「・・・すみませんでした。織斑先生。」
はぁ～～。やっぱり癖はそう簡単に直せないね。
「専用機持ちは織斑、オルコット、古代、デュノア、ボーデヴィッヒ、鳳だな。では8人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな。ああ、古代はエーカー先生に付いてくれ。新しい機体についてはお前しかわからないからな。では分かれろ。」

わかりました。僕も『須佐之男』の調整をしたいと思っていましたし。
「よろしく頼むぞ、古代少年。」
「はい。先ずエーカー先生専用機のバイオロイド『須佐之男』は・・・・・。」
あのあと、機体性能や武装の説明や本家スサノオとの相違点を伝えたり、他に追加したいものなどを聞きました。エーカー先生は『この性能で十分だ。』って言っていたけどね。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備、古代の場合はバイオロイドの整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」
一夏は、訓練機を1人で片付けたらしい。よく頑張ったね。僕は今、一夏やシャルルとともにいた。
「まあ、いいや。シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ。」
「え、ええっと・・・僕はちょっと機体の微調整をしていくから、先にいって着替えててよ。」
確かに大切だねそれは。ちょっとずつ微調整をすることによって、最高のコンディションに近付けるんだ。なるほどね。
「ん？いや、別ｎ「一夏、行こう。」な、どうした光？」
「微調整には時間がかかるから僕たちは先に行こう。」
「いや、でも「行こう一夏。」・・・わかった。」
本当だったら脱ぎたくないけど、ＧＵＴＳスーツは制服じゃないから着替えなきゃ。それと遅くなったけど、人の嫌がることを強要しちゃダメだよ。

第二十四話　流石！グラハム先生！！（後書き）

安定してます。流石はグラハムさんですね。

グ：そうか？

光：僕もそう思います。ミスター・ブシドーの名は伊達じゃないです。

一＆箒＆千＆真：ミスター・ブシドー？

G：こちらの話です。気にしないでください。

慶：やっぱ格が違うのか？

光：それは僕にもわかりません。

次回も楽しみにしてください。

サ＆フ＆？＆？：俺（私）たちを忘れるなよ（ないでもらいたいな）。

ダーク（以後ダ）：俺の出番はいつなんだ？

ｅｘ＋（以後ｅ）：気長に待ってみようではないか。

第二十五話　楽しい楽しい昼休み（前書き）

光：今回は一夏目線だね。

一：頑張るぜ。

G：上がらないようにお願いします。

グ：第二十五話、スタートだフラッグファイター諸君！！

第二十五話　楽しい楽しい昼休み

「・・・どういうことだ。」
「ん？」
昼休み、俺たちは屋上にいた。
普通、高校の屋上といえばアレがコレして生徒立ち入り禁止なのだが、ここＩＳ学園ではそんなことは一切無い。
「アレがコレして？」
「要するに、生徒が禁止項目を破り使用禁止になったということです。」
ナイス『Ｇ４』。簡単に言えば、そんなことをする生徒がいないってことだ。うつくしく配置された花壇には季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いている。それぞれ円テーブルにはイスが用意されていて、晴れた日の昼休みともなると女子たちで賑わう。
今日はみんなシャルル目当てで学食に向かったのだろう、屋上には俺たち以外誰もいなかった。イエイ、貸し切り。貸し切り、イエイ。
「そんなに貸し切りが良いの？」
「いや、女子たちがいるとゆっくり食べられないだろ？」
「そうですよマスター。今朝のことを忘れたのですか？」
「・・・確かに落ち着いて食べられないね。」
どうやら光もわかってくれたようだ。
「それはともかく、どうなってるんだこれは。」
「どうって、天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」
「そうではなくてだな・・・。」
ちらっと箒が横に視線をやる。そこにいるのは、順にセシリア、鈴、光、そしてシャルルだ。
「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それに

シャルルは転校してきたばっかりで右も左もわからないだろうし。」
「そ、それはそうだが・・・。」
「まぁまぁ、落ち着いて箒。それよりも早く食べようよ。時間がなくなるよ。」
光の言う通りだな。みんなそれぞれが用意した弁当を持っている。
ＩＳ学園は全寮制なので、弁当持参にしたい生徒のために早朝のキッチンが使えるようになっている。１度どんなものかと思って光と一緒に覗いてみたが、プロが使っているような器具ばかりで２人で唖然としたのを覚えている。さすがは国家直轄の特別指定校、使われているお金のケタが違う。
――――で、箒は今日弁当を作ってきたらしい。しかも俺の分まで。幼なじみって素晴らしい。
「ねぇ光。それは誰に作ってもらったの・・・。」
「そうですわね。私も知りたいですわ。」
光のやつ、セシリアと鈴に言い寄られてる。たしかあれは・・・。
「誰って、僕が作ったんだけど。ダメだったかな？」
「そ、そうでしたか。」
「な、な―んだ。良かった。」
まあ、あの２人が見間違うのも無理はない。端から見れば、プロが作ったように見えるもんな。しかも弁当箱も手作りらしい。
「光って、一体・・・。」
「気にしたら負けだ。」
俺だって初めはそう思った。光って人間なのかって思ったときもあったが、今はそう思わない。
「どうしたの鈴。もしかして食べたい？」
「え、いいの！」
「また作れるしね。１番食べたいものを食べて良いよ。」
「じゃ、じゃあこれちょうだい。」
鈴が選んだのは、程よい色に焼き上がった卵焼きだった。俺もそれが１番食べてみたかった。

「はい、あーん。」
「え？」
「どうしたの？いらない？」
「ち、違うわよ！もちろんもらうわ！」
鈴のやつ、何顔を赤くしてるんだ？セシリアも何か羨ましそうに見てるし。
「ところで箒、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだが・・・。」
「・・・・・。」
無言で弁当を差し出され、どうにも返事に困ってしまう。
「じゃあ、早速。・・・おお！」
もらった弁当を開けると、鯖の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、こんにゃくとゴボウの唐辛子炒め、ほうれん草のゴマ和えというなんともバランスの取れた献立の数々がそこにはあった。
「これはすごいな！どれも手が込んでそうだ。」
「つ、ついでだついで。あくまで私が自分で食べるために時間をかけただけだ。」
「とか言っちゃって。箒ったら今朝頑b「わーわーわー！」。」
箒、光の言いたいことが聞こえな「聞こえてなくてもいいよ別に。」・・・ならいいか。
「ん？箒、なんでそっちに唐揚げがないんだ？」
「ああ、それはね「光！」はいはい。」
？どうしたというのか。聞いたらまずいことだったのか？
「じゃあまあ、いただきます。」
とりあえず唐揚げをほおばる。
「おお、うまい！」
弁当なので当然時間がたっているし冷めているのだが、それでも箒の唐揚げはうまかった。
「・・・ぐふっ！」
光、セシリアの料理を食べてしまったか。セシリアの料理は見た

目は良いのだが、良いのは見た目だけであり味がすさまじくまずい。いくら光でも完食は「・・・でも、案外いいかも！」な、なんだと！セシリアの料理に好評価を付けるなんて。やっぱり光ってよくわからない！・・・今は唐揚げのことに集中しよう。

「これって結構仕込みに時間かかってないか？ええと、混ぜてるのはショウガと醤油と・・・んぐんぐ。なんだろうな。絶対食べたことのある味なんだけど。」

「おろしニンニクだ。それとあらかじめコショウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな。」

「へぇ！それはいいな。今度俺もやってみよう。」

あまりにおいしいので思わず驚いてしまった。・・・マジかよ。光のやつ、セシリアの料理を完食してやがる。本当に謎だ。

しかし、なんだ。アレだな。女子っていうのは炊事に家事に、覚えはじめると一瞬だな。男はものすごい時間の積み重ねがあってそこそこできる程度だというのに、女子のこの基本スペックの違いが羨ましい反面悔しくもあったりする。光もそうだったらしい。

「いやでも、本当にうまいな。箒、食べなくていいのか？」

「・・・失敗した方は全部自分で食べたからな・・・。」

「ん？」

「あ、ああ、いや、大丈夫だ。まあ、その、なんだ・・・。おいしかったのなら、いい。」

さっきから時々聞き取れないことがあるんだが、箒はなぜ小声で話すのだろうか。聞かれるとまずいことだったりするのかね。

「本当にうまいから箒も食べてみろよ。ほら。」

「な、なに？」

「ほら。食べてみろって。」

「い、いや、その、だな・・・。」

なぜかしどろもどろになる箒。その頬は心なしか赤いように見える。

「箒。人の好意には甘えてみるのもいいんじゃない。」

「そ、そういうものなのか？」
「そういうもの。」
「な、なら・・・。」
光にそう言われて、決心したらしい。
「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん。』っていうやつなのかな？仲睦まじいね。」
「そうそう。この2人は本当にお似合いだよね。」
シャルルや光はそう言ってるが、俺たちはそんなに仲良くないぜ。この前なんか、木刀で叩かれそうになったし。まあ、今はそんなことも無いけどな。
「じゃ、はいあーん。」
このはいあーんってなんでか普通に言えるよな。日本人の特権だろうか？
「あ、あーん・・・。」
多少ぎこちないながらもそう言って口を開け、唐揚げをほおばる箸。その頬がわずかに赤いところを見ると、照れているのかもしれない。うーん、やっぱり高校生になってはいあーんはなかったか？
「い、いいものだな・・・。」
「だろ？うまいよな、この唐揚げ。」
「唐揚げではないが・・・うむ。いいものだ。」
「これは好感触かな？」
なにが好感触なんだ？よくわからないぞ光。
「まあ、とりあえず食べようぜ。食べてすぐダッシュは避けたい。俺と光、シャルルはまたアリーナの更衣室までいかないといけないんだからな。」
「僕はともかく、シャルルは服の下に着てるんじゃない？」
え？どういうことだ？
「ん？一夏と光ってもしかして実習で毎回スーツ脱いでんの？」
「だって僕のスーツは生地が厚いから上に着てると変なんだ。」
「え？脱がないとダメだろ？」

鈴の言葉につい聞き返してしまう。もしかして――。
「女子は半分くらいの子が着たままよ。だって面倒じゃん。」
ぐあっ、そうだったのか・・・。たしかにまあ、汗は吸収してくれるし動きの邪魔にはならないし、着たままでもいいのか。
「ていうことは「いくら一夏でも女子の体をじろじろ見ない。」って光！なんでわかったんだ？」
「この頃最近、人の考えを読めるようになってきたんだ。」
・・・光って人をやめてるよな。普通人の思考は読めないって。
「・・・・・・。」
「どうかしたの、一夏。」
「男同士っていいなと思ってな。」
いや、本当に。今日から同じ性別の強い味方が2人に増えたわけだ。・・・今日から俺は1人部屋だけどな。
「あとでハロを貸してあげるから。」
「そういう問題じゃない！なんで俺が1人部屋なんだ！光が1人部屋でいいじゃないか！」
「仕方ないじゃん。ジャンケンで負けちゃったんだから。」
っく。たしかに負けたが・・・。でも理不尽だ！
「イチカ、ゲンキダセ。」
ハロ、気持ちは嬉しいけど・・・。
「一夏のところにもいくから。ね。」
シャルル、ありがとう。こんなに嬉しいことはない。
「・・・灯台もと暗しに気づかぬ愚か者め・・・。」
その後、なぜか俺は1日中ずっと箒から白い目で見られた。なんでなんだろうか。女子の考えていることは本当にわからない。

最後に光はこう思った。
「はぁぁ。いつになったら一夏と箒が付き合うのかな。」

第二十五話　楽しい楽しい昼休み（後書き）

今回はみんな疲れているので後書きはこれだけです。

楽しみにしていてくれた読者の皆様の期待を裏切るようで悲しくなります。

第二十六話　イレギュラー対イレギュラー（前書き）

今回は光たちが出てきません。

ダ：俺たちのショータイムだ。

ｅ：全く。誰に似たのか。

慶：そんじゃ、二十六話スタート！

ああっ！それ僕の台詞！！

第二十六話　イレギュラー対イレギュラー

光たちが昼食をとっているそのとき。
とある太平洋の沖合いで2機のＩＳが戦っていた。
「結構やるじゃねえか！」
「伊達に戦闘訓練を積んでねぇ！」
片方は先日ＩＳアリーナの上に立っていた紫のＩＳで、両腕に搭載された実体剣で剣撃を繰り出していく。もう片方は先日別世界から来た『ザ・ワン』と呼ばれたＩＳで、紫のＩＳの剣撃を避けながら背中に搭載されたドラグーンで紫のＩＳを狙い撃つ。
「当たれぇ！」
「そう簡単に墜ちてたまるかよ！」
『ザ・ワン』のパイロットの射撃の正確さには目を見張るものがあるが、紫のＩＳのパイロットの回避能力も侮れない。
「だが、お前の機体には格闘武器しか搭載されてない！遠距離から攻撃すれば、やられはしない！」
確かにそうだ。剣より銃のほうがリーチが長い。その分、銃を使う方は充分な距離を保って攻撃できる。しかし・・・。
「俺の『タイラント』を嘗めるな～～～！！」
紫のＩＳ『タイラント』は圧倒的なスピードで『ザ・ワン』に接近して膝蹴りを繰り出してきた。射撃に集中していた『ザ・ワン』のパイロットは回避出来ずに直撃し、吹き飛ばされる。
「これでおｗ『待て、ダーク。彼は『亡国企業』の一員ではない。』何！」
とどめをさそうとする『タイラント』のパイロット、ダークを『ｅｘ＋』が止める。どうやら『ザ・ワン』のパイロットを『亡国企業』のＩＳ操縦者と間違えたようだった。
『調べてみたんだが、『亡国企業』の男性ＩＳ操縦者はこのような機体を使っていない。よって彼は『亡国企業』の一員ではないの

だ。』

「ちっ。無駄骨か！くそっ！おい、そこの男のＩＳ適合者。命拾いしたな！」

そう言って、ダークは何処かへ飛翔していった。

「なんだったんだ？ＩＳ？まさか、ここって、アニメの世界？でも原作じゃあんなＩＳ出てないし・・・。どうなってるんだ？」

彼――御ノ方慶一は、そんなことを考えていた。

彼と光が出会うまで――――――あと数日。

第二十六話　イレギュラー対イレギュラー（後書き）

今回は『タイラント』の機体説明をしていきます。

ダ：俺の機体に惚れるなよ。

ダーク専用ＩＳ『タイラント』

姿はガンダムアストレイミラージュフレームサードイシュー。攻撃力・防御力・機動力など全ての性能が束製全てのＩＳを超える。射撃武器は無く、『タイラントモード』と『ブルートモード』を使い分けて戦う。しかし、この機体を使うと、パイロットに負荷が掛かり体を蝕み最悪の場合死に至るため、人はこのＩＳを『呪われたＩＳ』ともいう。

大丈夫なのダーク？

ダ：ああ。今はな・・・。それはともかく次回もよろしくな。

感想待ってます。

第二十七話　ＩＳ特訓！！（前書き）

今回は結構頑張りました！！

光：いつもは頑張ってなかったの！？

Ｇ：いつものネタなのでしょう。

つれないな『Ｇ４』は。では二十七話スタート！！

第二十七話　ＩＳ特訓！！

「じゃあ、改めまして。よろしくね、シャルル。」
「うん。よろしく、光。」
夕飯を食べ終わったから、２人で部屋に戻ってきた。前に鈴と一緒だったからベットは２つある。そのせいで僕の機材が隅に追いやられてるけどね。
「へぇ。光って何でも作れるんだね。」
「何でも作れる訳じゃないけど、機械全般は作れるつもりだよ。」
シャルルは部屋の中の機材に興味津々、僕は食後にお茶を飲んでる。
「マスター。これからどうしますか？」
『Ｇ４』は普通に話してくる。シャルルはその事を知ってるから驚かない。ましてや普通に会話をしてるから、女子ってよくわからない。普通はもっと驚くでしょ。
「それでシャワーのことだけど、順番ってどうしよう。」
「あ、僕が後でいいよ。光が先に使って。」
「じゃあ、僕が先に使って後からシャルルが使うってことで。」
因みに僕はどっちかっていうと、湯船に浸かりたいんだけどね。
「そういえば光はいつも放課後にＩＳの特訓しているって聞いたけど、そうなの？」
「うん。一夏が特訓してるから、それだったら僕も特訓しようかなって思ったんだ。」
これは本当の話。理由は、一夏が特訓してるからっていうことと、いつ何時に先日の紅いＩＳが来ても戦えるようにしたいからなんだ。更に今月は学年別トーナメントがあるしね。
「僕も加わっていいかな？何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ。」
「それはいいですね。１年の専用機持ちがほとんど集まってるの

でいい特訓ができると思います。」
「じゃあ、お願いするよ。それじゃ明日は一夏の特訓に付き合おう。僕も特訓できるしね。」
「うん。任せて。」
とりあえず腕立て伏せに腹筋、背筋を各１００回ずつするつもりだったけどもう寝ようかな。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ。」
「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが・・・。」
「つもりじゃ駄目だよ。きちんとわからないと。」
今日はシャルルとボーデヴィッヒさんが転校してきてから5日後の、つまり土曜日だ。土曜日はアリーナ全解放なのでほとんどの生徒が実習で使用する。僕たちも同じで、今日もこうして皆で一夏の特訓に付き合っている。もちろん、僕のもね。
「一夏の場合、知識として認識してる程度かな。さっきの手合わせの時だって、ほとんど間合いを詰められなかったじゃん。」
「うっ・・・、確かに。『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』も読まれてたしな・・・。」
「一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。」
「特に一夏の瞬間加速は直線的だから軌道予測で攻撃されるね。」
『しかし、瞬間加速中の無理の軌道変更は控えてください。マスターでなければ最悪の場合、骨折します。』
「・・・なるほど。」
一夏はちゃんと僕たちの話を聞いてくれる。でも僕たちだけである。なぜなら・・・。
『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ。』

『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。光だってそうでしょ。・・・はあ？なんでわかんないのよバカ。』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ５度傾けて、回避の時は後方へ２０度反転ですの。これくらい光さんは簡単にできますわ。』

はっきり言って、全くだめ。

箒の教え方は擬音語が多すぎて相手に伝わりにくい。鈴の教え方は言いたいことはわかるけど感覚は人それぞれだから不確定。セシリアの教え方は専門的すぎて一夏には理解できない。

だからシャルルに任せてあるんだけど、３人は腑に落ちないみたい。

「一夏の『白式』って後付武装（イコライザ）がないんだよね。」

「そうみたい。僕も調べてみたんだけど、拡張領域（バスロット）が空いていないらしいんだ。だから量子変換（インストール）は無理みたい。」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだと思うよ。」

後でこの事を聞いてみたんだけど、『白式』って欠陥機らしい。まったくなんでこんな機体を送ってきたんだろう。

「ワンオフ・アビリティーっていうと・・・えーと、なんだっけ？」

「言葉通り、唯一仕様の特殊才能。各ＩＳが操縦者との相性が最高状態になったときに自然発生する能力のこと。僕でいったら、『Ｍ・Ｃ・Ｓ（モビル・チェンジ・システム）』がその１つ。」

僕の『Ｇ４』も一夏の『白式』と同じで第一形態で発現しているけど、僕の場合はノアさんがわざと発現させたらしい。でも一夏のは珍しいし、何より他にも同じ単一仕様が発現しているＩＳがいるみたい。その機体と『白式』って何か因縁があるのかも。

「じゃあ、射撃の練習をしてみようか。はい、これ。」

そう言って渡したのは、五五口径アサルトライフル《ヴェント》。

「え？他のやつの装備って使えないんじゃないのか？」

「本来はそうだけど、所有者が使用許諾（アンロック）すれば使えるようになる

んだ。」
「その通り。今一夏と白式に発行したから、試しに撃ってみて。」
「お、おう。」
やっぱり一夏は銃器のことをわかっていないからか、構えがなっていない。これはシャルルに任せてみるかな。
「か、構えはこうでいいのか？」
「えっと・・・脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」
うん。シャルルに任せて良かった。分かりやすく、丁寧に教えているから構えがなってきた。
バンッ！！
「うおっ！？」
「どう？」
「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』って言う感想だ。」
速いか・・・。一夏らしいな。
「ねぇ、ちょっとあれ・・・。」
「ウソっ、ドイツの第3世代型だ。」
「まだ本国でのトライアル段階って聞いてたけど・・・。」
ああ、そういうこと。だからボーデヴィッヒさんが来たのか。
つまりはこういうこと。ドイツ本国で第3世代型の試作機ができたから、ＩＳ学園で性能テストをしに来た、ってところかな？
「・・・・・。」
いつ見てもボーデヴィッヒさんは一夏にプレッシャーをかけてるね。一夏はそのことに気づいていないけど・・・。
「おい。」
おっ。ボーデヴィッヒさんが初めて喋ったぞ。自己紹介以来だね。
「・・・なんだよ。」
一夏、反応が小さい。しっかり受け答えしないと。
『未遂でしたが、一夏はボーデヴィッヒに叩かれそうになったのですよ。無理です。』

そっか。そうだったね。
「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え。」
こんな密集空間で戦うなんて、周りを巻き込む気！？
「イヤだ。理由がねえよ。」
「貴様にはなくとも私にはある。」
自分の都合を他人に押し付けるなんて・・・。
「また今度な。」
「ふん。ならば戦わざるをいないようにしてやる！」
まずい！止めないと！

ラウラ・ボーデヴィッヒはその漆黒のＩＳを戦闘形態にしようとしたが、突如『Ｇ４』（ユニットはガンダム）を展開した光に阻止された。
「こんなところでいきなり戦闘を仕掛けるなんて・・・他の人を巻き込みたいんですか！」
「邪魔だ、どけ！」
どうやら阻止されたことに苛立っているようだ。ラウラはものすごい剣幕で光を睨む。しかしウルトラマンとして幾多の戦いをしてきた光にとって、どうということはない。
「イヤだ！そんなに戦いたいんじゃ、僕が相手するよ！」
「ふっ、面白い。どれ程の実力か確かめてやる。」
一触即発の場に他の生徒はただ見ていることしかできなかった。
『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』
突然アリーナのスピーカーからの声が響く。どうやら担当の教師が騒ぎを聞きつけてやってきたのだろう。
「・・・ふん。今日は引こう。」
２度横やり入れられて興が注がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。その後ろ姿が見

えなくなるまでの間、光はずっとラウラを見ていた。
「すまねぇ光。2度も助けてもらって。」
「いいよ。これくらいのことは当然だよ。」
つい数秒前まで感情が露になっていた表情はもうない。
「今日はもうあがろっか。四時も過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね。」
「おう。そうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった。」
「それなら良かった。」
そういって一夏は戻っていった。
「えっと・・・じゃあ「分かってる。先に着替えてるね。」うん。」
こうしていつも通り、光はシャルルより先に戻った。

なんでこうなったんだろう。
一夏がなぜか山田先生の手を握っている。しかもやや興奮気味である。どういう経緯でそうなったのかはわからない。更にまずいことにその場をシャルルにも見られたということだった。
「喜べ光、シャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」
「「そう。」」
あ、シャルルと言葉が重なった。すごい偶然。まあ、大浴場が使えることは嬉しいんだけどね。
「ああ、そういえば織斑君にはもう1つ用事があって、古代君には伝言です。」
内容は一夏は白式の正式な登録に関する書類を書くこと、僕はエーカー先生が須左之男の性能について詳しく聞きたいそうだ。
「そういうことだからシャルル。先にシャワーを使ってて。」
「え？あ、うん。」
さて、エーカー先生のところにいきますか。

第二十七話　ＩＳ特訓！！（後書き）

まだアンケートを受け付けているのに、いっこうに来ない・・・。

光：気長に待ちましょうよ。

一：１人来ただけでも儲け物だぜ。

箒：まだ来るかもしれないぞ。

そうだね。もう少し待ってみるよ。

グ：それでこそ君だ。作者よ。

そんなわけでまだまだ募集してますので、どしどし送ってください。

サ：できればこっち側のキャラを頼むぜ。

フ：勧誘するな、サーシェス。

？？？：我も期待してるぞ。

ダ：感想も待ってるぜ！！

ｅ：ダークが壊れていく。私はどうしたら・・・。

？：気にしてると、身が持たないぞ。

第二十八話　シャルルの正体（前書き）

とうとうこの話か・・・。

光：いったい何なの？

G：説明を要求します。

この話を見たらわかるよ。それでは二十八話スタート！！

第二十八話　シャルルの正体

やっと戻ってきた。今午後８時。
エーカー先生に１から教えていたらこんな時間になっちゃった。
「ただいま。ってシャルルはまだシャワーかな。」
部屋に帰ってくるとシャワーの音が聞こえてくるから、シャルルが使ってるんだろう。
「さて、ＧＵＴＳハイパーガンとＰＤＩの整備でも・・・そうだ。たしかボディーソープが切れたって言ってたっけ。持っていこうっと。」
シャワールームは洗面所兼脱衣所とドアで区切られているから、とりあえず脱衣所まで持っていってそこで声をかけようかな。
そう思って僕は洗面所に入った。
ガチャ。
ん？あれ？さっきドアを開けて入ったよね。またその音が聞こえるのって変だな。・・・分かった。シャルルがシャワールームのドアを開けたんだ。ちょうどいい。シャルルに渡そうっと。
「シャルル。これ、替えの―――」
「ひ、ひ、ひか・・・る・・・？」
「へ・・・？」
シャワールームから出てきたのは、紛れもない『女子』だった。
・・・ここは僕とシャルルの部屋だよね。ドアにはカギがかかってたから他の人が入れるわけがない。何がどうなってるんだ？
「とりあえず・・・はいこれ。替えのシャンプー。」
「あ・・・うん。ありがとう。」
「じゃあ、出てるね。」
替えのシャンプーを渡して、脱衣所から出る。これは夢なのかな？
「現実逃避しないでくださいマスター。」
やっぱり現実かぁ～～。

「あ、上がったよ・・・。」
「う、うん。」
背中越しに聞く声は、やっぱりシャルルのものだった。さっきまで『G4』と話し合った結果、シャルルしかいないという結論になってたからそんなに驚かなかった。でも振り向くと、そこには女子がいた。
「・・・飲み物でも飲む？」
「あ、えーと・・・。じゃあ、貰おうかな。」
僕は冷蔵庫から缶ジュースを2つ出して片方をシャルル？に渡す。
「不本意ですが、何故シャルルは性別を偽っていたのですか？」
不意に『G4』がそう聞いた。僕も気になってたんだ。
「僕も聞きたいな。あ、でも言いたくなかったら、言わなくてもいいよ。」
「う、うん。」
僕だって人が嫌がることを強要したくないからね。
「それは、その・・・実家の方からそうしろって言われて・・・。」
「実家っていうとデュノアだから・・・、フランスのデュノア社か。」
「そう。僕の父がそこの社長。その人からの直接の命令なんだよ。」
・・・なんで親なのに『その人』っていうんだろう。しかも実家の話をし始めてから、シャルルの顔が曇り出していた。
「・・・親なのに、なんで命令されるの？」
「僕はね、光。愛人の子なんだよ。」
・・・え？
「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが無くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩ

S適正が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね。」
・・・何それ。世間に公にならないように連れ去って、実験してたら適正が高いからパイロットにさせた？
「ふざけないで！いい加減にしてよ！」
「ひ、光・・・？」
見ると、右手にあったスチール製の缶が意図も簡単に潰れてた。でもそんなことは関係ない。
「それが親のすることなの！自分の子供を道具のように使って。人は道具なんかじゃない！」
そのせいでシャルルは性別を偽ってＩＳ学園に転入しなければならなくなったんだよ！これが大人のすることですか！
「ど、どうしたの？光、変だよ？」
「ご、ごめん。つい熱くなっちゃった。」
「いいけど・・・本当にどうしたの？」
「僕は・・・自分の親の顔がわからないんだ。」
「え・・・？」
「マスター、それはどういうことですか？」
ああ、そういえば『Ｇ４』にも言っていなかったね。
「僕は物心がついたときから１人だったんだよ。両親はどうしたのか、兄弟はどこにいるのか、っていつも思いながらね。そんな僕が生きていけたのは、周りの人たちのお陰なんだよ。」
みんなは身寄りのない僕のことを思って、全員で僕を育ててくれたんだ。・・・３０００万年前にみんな死んじゃったんだけど。
「気にしなくてもいいよ。もう過ぎたことだし、今の生活に満足してるから。話を続けて。」
「うん。それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの。」
「・・・欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』のせいなんだね。」

「その通り。量産機ＩＳのシェアが世界第３位でも、結局リヴァイブは第２世代型なんだよ。計画から除名されているから第３世代型の開発は急務なの。」
前にセシリアから聞いたことがある。現在、欧州連合では第３次イグニッション・プランの次期主力機の選択中で、イギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型がトライアルに参加していて、実稼働データの採取のためにＩＳ学園に送られたみたい。
「それで、デュノア社が注目を浴びるための広告塔。そして特異ケースの一夏と僕、そしてそのＩＳのデータを取るために男装をしたんだね。」
「そんなところかな。でも光にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。」
・・・。
「フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな。」
「それでいいの？」
「言いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ。」
やっぱりこんなこと間違ってる・・・。
「・・・だったら、ここにいて。」
「え？」
「特記事項第２１です。」
「『Ｇ４』のいう通り。特記事項第２１、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。つまり、この学園にいれば、少なくとも３年間は大丈夫。なんとかなるよ。」
「光、よく覚えられたね。特記事項って５５個あるのに。」
「『Ｇ４』のお陰だよ。」

「伊達に高性能ＡＩではありません。」
「そうだね。ありがとう2人とも。」
良かった良かった。シャルルの顔に笑顔が出た。シャルルには笑顔が似合うね。
「それに、たとえ卒業しても僕がシャルルを守るよ。」
「え／／／その・・・う、うれしいよ／／／」
ん？シャルルったら、シャワーだったのにのぼせてる。大丈夫？
「それよりこれからどうします？」
「シャルルのために、『ジェガン』の設計図をＩＳ用に変更してデュノア社に送ろう。」
「そ、そんなことができるの？」
「僕を誰だと思ってるの？」
まあ、変更っていってもちょっと手直しするぐらいだから・・・っと。完成。
「これを匿名で転送。その代わりにシャルルの戸籍の所得、『ラファール・リヴァイブカスタム？』の改造を認めさせようっと。」
「やっぱり光って凄い。」
友達のためならなんだってするよ。友達を傷つけるやつは許さないしね。
「ってもうこんな時間。シャルル、ご飯食べた？」
「うん。もう食べたよ。」
「じゃ、寝ようか。」
「うん。」
さてと、明日から忙しくなるぞ～～。シャルルのＩＳを改造するけど、元を『ストライクガンダム』にしようかな。
僕はそんなことを思いながら、眠りについた。

第二十八話　シャルルの正体（後書き）

光：まさかシャルルが女の子だったなんて。

Ｇ：それにしてはさほど戸惑いませんでしたね。

グ：古代少年はこのような状況に慣れているようだな。

サ：何でＧＮ-Ｘじゃないんだよ。

フ：それを言うならギラ・ズールであろう。

僕はジェガンが好きなの！！文句を言わない！！

サ＆フ：・・・・・。

大丈夫。ＧＮ-Ｘもギラ・ズールも出すから。

サ＆フ：流石は作者だな。

ダ＆慶：次回もお楽しみに。

ｅ：感想を待っている。

第二十九話　登場『ストライク・リヴァイブ』！！（前書き）

光が作りし機械第３弾！！

Ｇ：作ったというより、改造ですね。

グ：たしかに。

光：だって『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』を元にしてるんだもん。

まあそれは置いておいて、二十九話スタート。

第二十九話　登場『ストライク・リヴァイブ』！！

「それでどうするの？」
日曜の朝、僕はシャルルと共にＩＳ整備室にいた。シャルルのＩＳを改造するためだ。
「『ラファール・リヴァイブカスタム？』に新しいシステムを搭載しようかなって考えてるんだ。」
「どんなシステム？」
「『ストライカーパックシステム』だよ。
「『ストライカーパックシステム』？」
ここで読者のみんなにもわかるように説明させていただきます。
『ストライカーパックシステム』とは、『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』に出てくるＭＳ『ストライク』が搭載するシステムで、戦況に応じて適切な武装に変更することで、一機で各々の戦闘機と同様、もしくはそれ以上に性能を引き伸ばすシステムのことです。更にストライカーパックには大容量バッテリーが内蔵されていて、瞬時にエネルギーを回復させる効果もあります。
以上、僕の説明でした。
「す、凄いよ、そのシステム。」
「シャルルのＩＳには、このシステムと、エール・ソード・ランチャー・ライトニングの４つのパックを拡張領域に量子変換するよ。そうすると、武装は標準で『ヴェント』と『ガルム』を残しておこう。」
僕は３つの画面を見ながら、手を動かして書き換えしていく。シャルルが初めてこれを見たときはすごく驚いていたよ。
「許可は取ってあるんだよね？」
「大丈夫。『ジェガン』の設計図を転送したら、快く了承してくれたよ。」
それほど第３世代型の開発にこだわってるんだね。

「武装は既に完成してるから、あとは機体だけだ。よーし、改造するぞ！」
ここをこうして、ああしてっと・・・。

「完成したよ。名前は『ストライク・リヴァイブ』。」
「これが新しい僕のＩＳ・・・。」
「やっぱり４つが限界だったよ。拡張領域が倍といっても、ストライカーパックで９割埋まっちゃった。」
だけど、それほど強力な武装なんだ・・・ん？
「誰かそこにいるの？」
そう言うと、機材の後ろから誰かが出てきた。
「・・・いつから気づいてたんですか？」
「さっきだよ。何か視線を感じるなって思ってたんだ？」
出てきたのは、髪がセミロングの、長方形レンズの眼鏡をかけている女子だった。
「あの子って、たしか４組の更識さんだよ。」
更識っていうと・・・たしか生徒会にも同じ名字の人がいたね。
「何か用？」
「いえ、なにも。」
そう言うと、更識さんは戻っていった。変だな。じゃあなんで、後ろに隠れてたんだろう？でももう聞けない。
「光。このあとどうするの？」
「そうだね。『ストライク・リヴァイブ』の稼働実験をしたら、少し手直しするよ。」
「そのあとは何もない？」
「ごめんね。そのあとも何かと忙しいんだ。でもシャルルは戻ってもいいよ。」
色々と造りたいものがあるんだ。『換装装備』《パッケージ》とかね。

「・・・そうなんだ。」
「それじゃあデータを取るために、アリーナに行こう。」
「う、うん。」
1度言ってみたかったんだ。
「見せてもらおうか。新しくなったシャルルのＩＳの性能とやらを。」
「光、その台詞は似合わないよ。」
「いったい何をしたいんですか？マスター。」
・・・酷い言われようだよ。

「さてと、パッケージでも・・・ん？」
また整備室に戻ってきた僕の目に、1体のＩＳが入ってきた。こんなＩＳあったっけ？
「えっと名前は・・・『打鉄弐式』って言うんだ。」
名前からして、純国産量産機ＩＳ『打鉄』の発展機なんだろうね。よくみると、ディスプレイが表示されている。
「どれどれ。・・・うわぁ無茶苦茶だよこの構成。本来媒体を繋げるところに媒体を繋げないでダイレクトに繋いでるし、スラスターなんて本来の性能の３０％も出せてないよ。ああ、書き換えたい！」
誰なの！この機体を作ったのは！
「・・・なんでここにいるんですか？」
ふと声をかけられたから振り向いてみると、先程の更識さんがいた。
「いやぁ自分のパッケージを作ろうとしたら、このＩＳ『打鉄弐式』を見つけちゃって見てたんだ。」
「！・・・開発ができるんですか！？」
何かいきなり声を大きくしたけど、どうしたの？
「あの・・・、一緒にみてもらっても、いいですか？」

「もちろんいいけど、弄ってもいい？」
「私が造ったＩＳですけど・・・、いいです。」
やった！よーし、改造するぞ！・・・ん？
「もしかして、自分１人で造ったの？」
「はい。でもまだ基本しか・・・。」
そうだったんだ。難しいよね、開発って。
「じゃあ始めようか。」
僕は『打鉄弐式』のディスプレイを全部表示させる。・・・へえ、『マルチ・ロックオン・システム』か。
「このシステムは『フリーダム』のやつを流用して・・・、荷電粒子砲はＺガンダムの『ハイパー・ビーム・ランチャー』を使って・・・。」
「『フリーダム』？『ハイパー・ビーム・ランチャー』？」
「ああ、こっちの話だから気にしないで。」
これって結構、簡単にできるかも・・・。

それから３時間かけて、機体を仕上げた。といってもまだまだ手直しは必要だけどね。
「・・・色々とありがとうございました。」
「気にしないで。僕も知識を役立てれて良かったしね。」
見ると、時計は午後３時になろうとしていた。
「そろそろご飯を食べにいこうっと。じゃあね、更識さん。」
「・・・簪です。」
「え？」
「私の名前は、更識簪です。・・・名字で呼ばれるより、名前で呼んでもらいたいです。」
簪さん・・・か。いい名前だね。
「・・・わかったよ、簪さん。またね。」
「・・・本当にありがとうございました。」

僕は簪さんと別れて、食堂に向かう。今日も納豆定食ご飯大盛りだ。

第二十九話　登場『ストライク・リヴァイブ』！！（後書き）

一：完全にＩＳとして超えてるぞ『ストライク・リヴァイブ』！！

箒：流石は光と言ったところか。

セ：全距離対応型ですか。厄介ですわ。

鈴：最強じゃんこのＩＳ！！

シャルル（以後シャ）：ありがとう光。

光：これくらい当然だよ。

次回もお楽しみに。・・・あっ、ガンプラ作りたいな。

一同：自由すぎる！！

第三十話　光の本気４文の１（前書き）

光：何このタイトル！？

グ：何かデジャブを感じるぞ・・・。

G：早く始めてください。

それでは三十話スタート！！

第三十話　光の本気４文の１

「そ、それは本当ですの！？」
「う、ウソついてないでしょうね！？」
月曜の朝、眠い目を擦りながら教室に向かっていた僕は廊下にまで聞こえる声で目を覚ました。
なんで眠いかっていうと、お昼ご飯を食べたあと整備室でパッケージを４時間かけて造って、時間があるから『アレ』も造ってたら、終わったのが午前２時。アリーナのシャワーを使い、部屋まで戻って来たときは既に３時を過ぎてたから急いで寝たんだ。でもまだ眠かったよ。
「なんだ？」
「さあ？」
一緒にいるのは、一夏とシャルル（男装バージョン）。朝食を終えてここに来る途中偶然一夏と会ったから、一緒に来たんだ。
「また例の『女子同士で秘密の話し合い』でしょうか？」
「かもね。でも、声大きすぎだよ。」
これじゃ秘密でもなんでもないよ。
「本当だってば！この噂、学園で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か古代君と交際でき――――。」
「「俺（僕）がどうしたって？」」
「「「きゃああっ！？」」」
あらら、驚かれちゃった。普通に一夏に揃えて話しかけたつもりだったのに。
「で、何の話だったんだ？俺たちの名前が出ていたみたいだけど。」
「う、うん？そうだっけ？」
「さ、さあ、どうだったかしら？」
話を逸らされてる。・・・裏があるな。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」
「そ、そうですわね！私も自分の席につきませんと。」
どこかしらよそよそしい様子で2人はその場を離れていく。他のみんなも自分のクラスか席に戻っていく。
「・・・あ、ＧＵＴＳハイパーガンを部屋に忘れてきちゃった。」
「何げに物騒なこと言うなよ光！」
「光、なんで銃を所持してるの？」
し、しまった～～～！

「はぁ、ＧＵＴＳハイパーガンを没収されちゃうかな・・・。」
あのあと織斑先生がやって来て、一夏が先生にそのことをいっちゃったんだよね。そのとき織斑先生は僕を見てたけど、絶対怒ってるよ。まあ、そのときはそのときだから、仕方ないよね。
「よし、次の授業のじゅｎ「なぜこんなところで教師など！」「やれやれ・・・。」・・・？」
この声は、織斑先生と・・・あのラウラ・ボーデヴィッヒか。何か重要そうな話のようだから、気配を消して聞いてみるか。
「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ。」
「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」
失礼な！ダイブハンガーだって極東の海にあるんだ！ラウラ・ボーデヴィッヒにそんなこと言われたくない！
「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません。」
「ほう。」
「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません。」
・・・ラウラ・ボーデヴィッヒ。どこまでみんなを格下扱いすれば気が済むんだ！絶対許さない！
「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど「そこまでにしておけよ、小娘。」っ・・・！」
織斑先生・・・？
「少し見ない間に偉くなったな。１５歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る。」
「わ、私は・・・。」
「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ。」
ぱっと声色を戻した織斑先生がせかして、ラウラ・ボーデヴィッヒは黙したまま早足で去っていった。・・・うん。織斑先生が僕の代わりに代弁してくれた。
「そこの男子。盗み聞きか？・・・最も。そうしていると無意味だがな。」
「・・・いつから気づいていたんですか？」
「ついさっきだ。感情を剥き出しにするまで気づかなかったぞ。」
良かった。ラウラ・ボーデヴィッヒには気づかれていないようだ。
「じゃあ、教室に戻ります。」
「待て。」
なんだろう？話でもあるのかな？
「はい。」
「お前が持っているという銃は、護身用で人を傷つける物ではないんだな。」
「はい。できれば、みんなを守りたいです。」
「そうか。それならいい。」
織斑先生はそう言うと去っていった。ということは、ＧＵＴＳハイパーガンは没収されないんだね。
「あ、教室に戻らなきゃ。」
僕は、ばれないように廊下を走り出した。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」
「ああ、もちろんだ。なぜか知らないが、光もやる気みたいだし。」
「今日は高機動特訓だ。アリーナを高速で駆け抜けるんだ。たしか場所は「第３アリーナだ。」ありがとう、箒。」
僕はシャルル・デュノア。ＩＳ学園の１年生です。これから光たちと一緒に、特訓をするために廊下を歩いています。でも、アリーナに近づくにつれてだんだんと慌ただしくなってきてるけど、何があったのかな？
「観客席で様子を見てみよう。」
光がそう言ったから、続いて観客席に入ってアリーナのほうを見てみた。
「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしては様子が――。」
ドゴォン！
「「「「！？」」」」
突然の爆発に驚いたけど、煙の中から飛び出して来た影にさらに驚いた。
「鈴！セシリア！」
光が叫ぶけど、特殊なエネルギーシールドでこっちの声は向こうに聞こえない。２人のことが心配なのはわかるけど・・・。
「！？やっぱり！」
そう言うと光は観客席から飛び出していった。やっぱりって？
不思議に感じた僕は、アリーナで起こった爆発の中心部へと視線を向けると、漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラの姿があった。
よく見ると鳳さんとオルコットさんのＩＳはかなりのダメージを受けていて、機体はところどころが損傷し、ＩＳアーマーの一部は完全に失われている。あれじゃあ、ダメージレベルＣまでいっちゃうよ！光はどこにいってるの？

「これで終わりだ。」
ラウラが2人に攻撃しようとしたとき、ピンク色の閃光がラウラのＩＳを掠め、シールドエネルギーが削られる。その攻撃を行った人は・・・。
「「「光！」」」
ユニット『ガンダム』を展開した光が立っていた。

「鈴とセシリアをよくも！」
ビームライフルを最大出力でラウラ・ボーデヴィッヒに撃ち込む。避けたけど、シールドエネルギーはもらった！
「何っ！？掠めただけでエネルギーが！」
「よそ見するな！」
続けて3回ビームを撃ち込む。するとラウラ・ボーデヴィッヒは右手をかざし、何かを形成する。すると、ビームが掻き消えラウラ・ボーデヴィッヒに当たらなかった。
「このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では無駄だ。」
どこかで聞いたことがある。
ＡＩＣ、パッシブ・イナーシャル・キャンセラー。またの名を『慣性停止能力』ともいう。任意で物理的に動く物を止めることができる、１対１で反則的な強さを見せるシステム。だけど認識できなければ止めることはできない。だったら・・・。
「システム起動、『ＡＬＩＣＥ』！」
僕はユニット『ガンダム』に搭載されている『ＡＬＩＣＥ』を起動させる。
「今から高機動戦闘を行うから、サポートして！」
『了解シマシタ。無茶ハヤメテクダサイネ。』
『ＡＬＩＣＥ』を起動させた『ガンダム』は速いぞ！

第三十話　光の本気４文の１（後書き）

光：『ＡＬＩＣＥ』か・・・。

ＡＬＩＣＥ（以後Ａ）：私モ出番ガ欲シイデス。

ごめん。ＡＬＩＣＥはここでお役目御免なんだ。

Ａ：・・・・。（後ろにＥＸ－Ｓガンダムがいる）

ＥＸ－Ｓ・・・！？本当にごめん。後書きでも出すからガンダムだけは・・・、イタイイタイイタイイタイ！！

Ｇ：・・・じ、次回もお楽しみに。

Ａ：感想ヲ待ッテマス。

第三十一話　古代・光対ラウラ・ボーデヴィッヒ（前書き）

A：後書キデ出シテモラエルヨウニナリマシタ。

光：よかったね。

そ、それでは三十一話スタート・・・。

G：・・・災難でしたね。

第三十一話　古代・光対ラウラ・ボーデヴィッヒ

ここはとある建物の1部屋。
この部屋にいるのは、サーシェス、フロンタル、そしてこの2人を仲間にした???（名前は秘匿）がいた。
「どうだ？あのシステムの様子は？」
「ああ。まだ起動しないのでなんとも言えないが、あれは代表候補生でも抑えることはできんな。」
どうやら何かのシステムの話をしているようだ。だが代表候補生でも抑えることができないシステムとはなんであろうか。
「しっかしまぁ、条件が揃わないと起動しないなんてな。欠陥品じゃねえのか？フロンタル。」
「私がそうしたのだ。そうでもしないと、感づかれるからな。」
「成る程、流石はフロンタルだぜ。」
サーシェスはフロンタルを素直に褒める。
「そこで、フロンタルに頼み事をしたい。」
「なんだ？」
「ＩＳ学園で学年別トーナメントをやるらしいのだが、ドイツ技術者としてＩＳ学園に潜入してくれ。」
???は何をさせようとしているのだろうか？
「目的は世界で唯一の男性ＩＳ適合者2名、もしくはそのＩＳの強奪だ。その解析結果を見たいものでな。」
「わかった。引き受けよう。」
「助かる。それから、あと1人を連れていって欲しい。」
そう言って呼んだのは、腰に刀をさした屈強そうな男だった。

『マスター、鈴さんとセシリアさんの救助も考えてください。』
『わかったよ。『ＡＬＩＣＥ』。2人までのルートを割り出して。

』
『了解シマシタ。ルートヲ検索シマス。』
割り出されたルートを通って2人のところまでいき、両脇に抱えて再び飛翔する。でも2人はＩＳが解除されていて速く飛べない。
「ふん。戦いで相手に背を向けるとは、まだまだだな。」
そんな僕にレールガンが向けられる。避けきれない！
レールガンが発射されそうになったとき、赤色のビームがレールガンに直撃、爆散する。ビームが発射されたところには、『ストライク・リヴァイブ』を展開したシャルルと『白式』を展開した一夏がいた。
「光、大丈夫か？」
「うん。2人をお願い。」
2人を一夏たちに頼んで、ビームサーベルを抜いてラウラ・ボーデヴィッヒに突貫する。相手もレーザー手刀を出し接近する。斬りかかろうとしたとき、2つの影が割り入ってきた。
「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れますな、エーカー先生。」
「全くです。模擬戦で死傷者が出るのだけは避けたい。」
織斑先生にエーカー先生、なんで生身でＩＳ用の近接ブレードを軽々と扱ってるんですか？
「古代少年、この決着は、学年別トーナメントでつけてもらえるか？」
「・・・わかりました。」
ラウラ・ボーデヴィッヒは許せないけど、エーカー先生が言うなら仕方ないよ。僕はＩＳの装備状態を解除する。
「織斑、デュノア、ボーデヴィッヒ、お前たちもそれでいいな？」
「教官がそう仰るなら。」
「は、はい。」
「僕もそれで構いません。」
一夏、シャルルも追従する。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。全員解散！」
エーカー先生は改めてアリーナ内の全ての生徒に向けてそう言った。

「・・・・・・。」
あれから光の機嫌が悪い。まるで光が怒ったときみたいだ。
「光さん。私たちは大丈夫ですわ。」
「そうよ。怪我だって大したことないし。」
「・・・・・・。」
駄目だ。完全に怒ってる。
「光、どうしたの？」
「シャルル、覚えておけ。光を怒らせないほうがいい。」
「・・・？」
シャルルはわかってないな。
「光は怒ると、ずっとあのままだぞ。」
「・・・それは、やだね。」
あのときの光は怖かった。
ドドドドドドドッ・・・！
「な、なんだ？何の音だ？」
次の瞬間、ドカーン！と保健室のドアが吹き飛ぶ。・・・いや、本気で吹き飛んだんだ。
「織斑君！」
「デュノア君！」
「古代・・・君？」
入ってきた、いや雪崩れ込んできた女子は、光の負のオーラに気負けしてる。どんだけ怖いんだよ。
「・・・・・何？」
おお、やっと口を聞いてくれたぞ。

「あ、その・・・これ・・・。」
光は女子から紙を貰う。
「・・・『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、2人組での参加を必須とする。』・・・？」
「だからね・・・その・・・古代君と組みたいなって思って・・・。」
それにしても、光に話しかけてる女子は本当に勇気があるな。
「・・・ごめんね。シャルルと組もうと思ったんだ。多分、一夏にも組みたい人がいると思うよ。」
あれ？光の機嫌が直ってる？
「まあ、そういうことなら・・・。」
「はぁ、もう少し早く誘いに来ればよかった。」
納得してくれたのか、女子たちは各々が仕方ないかと口にしながら、1人また1人と保健室を去っていく。それよりも、なんで光の機嫌が直ったんだ？
「ボーデヴィッヒさんを憎んでも何も変わらないし、何も進展しない。だったらボーデヴィッヒさんのことを詳しく知ったほうが、今よりずっと仲良くなると思ったんだ。」
「「「「なるほど・・・。」」」」
光も色々なことを考えてるんだな。
「・・・それに、一夏と箒がペアになれば安泰だからね。」
「ん？光なんか言ったか？」
「いや何も♪」
「「「「それは、光には似合わない！」」」」
「そんなぁ～～～。」
でもいつも通りの光が1番だ。このときの俺はそう思った。

「流石は『俺』だな。あんな奴ごときに勝てない訳がない。」
「だがどうする？また『亡国企業』が攻めてきたら彼は・・・。」

「大丈夫だろ。アイツには仲間がいる。」
月明かりが学園を照らす夜。ダークとｅｘ＋は話し合っていた。
「それに何かあったら俺が・・・、ゴバァ！」
ダークは急に咳き込み、大量の血を吐き出す。
「大丈夫か！？いくら君でもこの『タイラント』の負荷に耐えられない。無茶をするな！」
「大丈夫だ、問題ない！こうなることは既に受け入れている！でなければこの機体に乗らない！」
物凄い剣幕で、ダークはそう主張する。
「こんなところで俺は死ねない！アイツを守るためにも、ここで！」
そう心に誓うダークであった。

第三十一話　古代・光対ラウラ・ボーデヴィッヒ（後書き）

今日も後書きがありません。

本当にすみません。

次回も楽しみにしていてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5448v/

ＩＳ　光の英雄

2011年10月17日21時42分発行